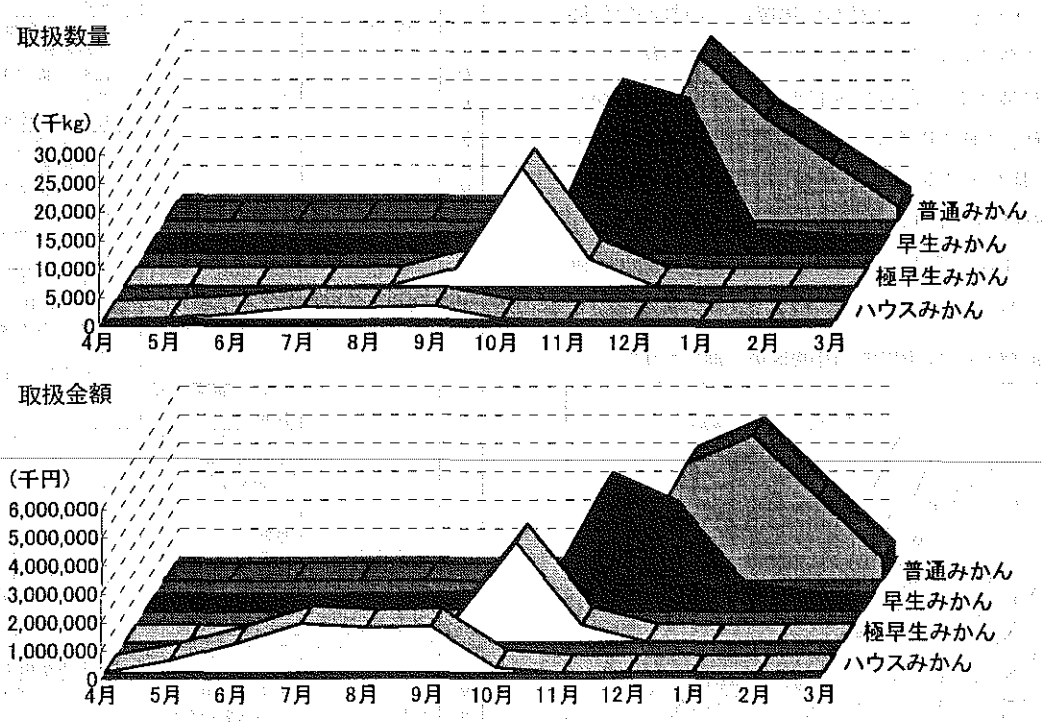
よかネット
YOKANET

NO. 47 2000. 9
㈱よかネット

もくじ

NETWORK
福岡市の都心定住　その後
若い世帯が増えつつある
今こそ、多世代共住都心づくりの絶好のチャンスか …… 2
旬のはなし① ～みかんは今～ …… 5
人もうけ通信
農村の人々と都市の人が、農村集落の中で共生できるのだろうか
－七山村（佐賀県東松浦郡）で楽しい共住を見つけた－ …… 7
地域もどこと付き合えばプラスになるか考える時代に 5
よいことをする地域にはよい人が集まる“なぎさの伝習所” …… 8
「カッホー馬古屏」の元気の秘訣 ～第64回地域ゼミ～ …… 12
地域計画のための一知半解事典⑪
要介護率は本当に１割なのか …… 13
見・聞・食
地域を変える障害者 2
全ては施設入所の障害者も外に出歩きたいという
要望から始まった「外出サポート倶楽部サルク」と
「自立生活センターちくご」 …… 14
近　況
自分達の住んでいるまちをもっとよく知ろう
～いなつき再発見～ …… 16
地方分権について考え、歴史の重みにふれた２日間
～地方シンクタンク協議会報告～ …… 18
お隣台湾の伝統的建造物の保存・活用事情 …… 19
農業日記2000夏……いとしまつうしん …… 20
「よかネット」への御意見、近況などを
皆様に寄せていただきました …… 22

「旬」があやしくなっている



旬は、広辞苑によると「魚介、蔬菜、果物などが良く熟して味の最も良い時期」とある。出荷量の多い次期と味の良い時期は重なるとすると、普通ミカンの出荷量は12月から２月にかけてが最も多く（平成11年東京都中央卸売市場年報）、この時期が本来のミカンの旬であると考えられる。しかし、早生ミカンは普通ミカンより約１ヶ月早く、極早生ミカンはさらに１ヶ月早い。ハウスミカンに至っては半年近くのずれがある。生産者にとっては旬を外すことが高収益の元となる。味の良い物がとれるようになれば、それも旬なのだろうか。食べ物の旬はあいまいになっている。（本文５頁に関連記事）

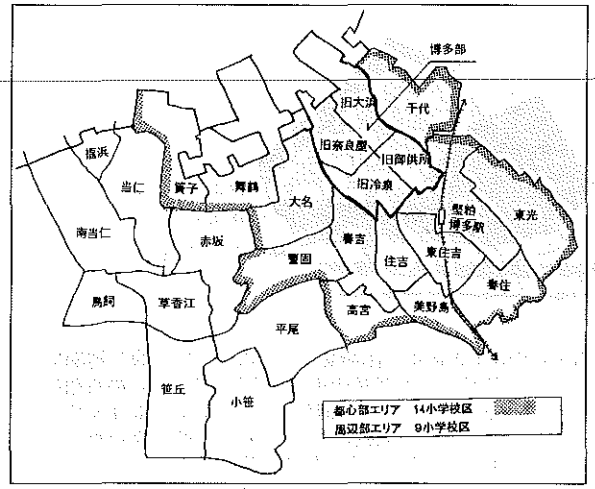
福岡市の都心定住　その後

若い世帯が増えつつある　今こそ、多世代共住都心づくりの絶好のチャンスか

山田　龍雄

福岡市で都心定住の問題が言われたはじめたのは、昭和62年頃ではなかったかと思う。このきっかけとなったのが「福岡市地域計画（HOPE計画）」策定であった。当時、このホープ計画策定においては県の方から『福岡市全体のことをやらないとダメではないか』とのご指導もあったようだが、福岡市の住宅問題は都心部が主要なテーマであるという視点から、落としどころは都心部に絞って施策展開を検討することは決めていた。私はこの計画づくりのお手伝いをした経緯もあり、都心定住問題はいつも気になるテーマのひとつであった。この当時、都心部では確実に人口が減少していたのであるが、関係係長の会議では『人口密度は大浜でも105人／haぐらいあるのだから全然問題ではない』、『都心部に人口定住なんて考えなくてもいいのではないか（この方はたぶん都心部を限定したエリアでとらえていた）』という人もおり、全般的に福岡市での都心定住問題は認知されていなかったように思う。その後、バブル最盛期に突入し、さらに人口減少には歯止めがかからなくなり、平成4年度には都市整備局課主導のもとで「都心定住構想」を策定し、平成10年度には総務企画局企画調整部の基で「都心居住・博多部振興プラン」が策定され、下記に示しているような施策を実施、計画しながら今日に至っている。

図－1 都心部エリアと周辺部（中央区の一部）エリア



●都心部に若い世帯が住みはじめているのでは？

ある仕事の打ち合わせも終わり、担当の30代前半の人と雑談していると、この方が「実は、近々引っ越しします。最近、博多部で建設されているマンションを購入しました。今、東区の奈多の方に住んでいるのですが、通勤費に月3万円程度かかり、飲んでタクシーに乗ると5千円ぐらいかかります。月2～3回タクシーで帰ると交通費だけでも4～5万円になり、都心部に住むのは経済的にも利便性の点でもメリットがあります。都心部に移ったら、会社（長浜の方）までは自転車通

表－1 都心定住の体系（都心居住・博多振興プラン）
都心定住施策の一覧

	施策の大綱	施策の展開	具体的施策・考え方
居住人口の確	住宅の整備	民間住宅市場の誘導	・ファミリー住宅建設における埋蔵文化財調査費などの建設費助成 ・特定優良賃貸住宅で実施中
			・総合設計制度の活用
		公有地の活用	・学校跡地の活用 ・高齢者向け福祉施設等整備 ・社宅等の誘導
			・公共施設と公共住宅の合築推進
		共同化の促進	・共同化促進助成事業の推進 ・優良建築物等整備事業推進
	高齢世帯の居住対策		・安心して暮らせるまちづくり推進 ・高齢者福祉施設等の整備 ・高齢者向け住宅の整備
	居住の誘導	子育て世帯居住誘導	・居住支援
		博多部愛着居住	・住民バンク制度の活用
		人口の誘導	
	居住環境の改善・整備	公園等緑のオープンスペースの整備	・公園用地等の確保
		非戦災地域の居住環境の整備	・大浜地区住環境整備 ・御供所地区住環境整備
		ウォーターフロント隣接地区の環境整備	・石城町・築港本町築環境整備
		教育環境整備	・学校教育環境の整備 ・博多小整備中
地域の活性化	地域コミュニティの活性化	まちづくり・ボランティア活動の育成 地域の自立した組織づくり	・まちづくり協議会の支援 ・ボランティア活動の育成 ・地域の自立的組織づくり（NPOなど）
	地域経済・文化の活性化		・地域回遊軸の形成 ・地域の主体的活動への支援

勤しようと思っています。」というようなことを話された。購入されたマンションは3LDK（専有面積約76㎡）で約2,400万円程度との話しであったので、交通費のことを考えると、返済も楽になり、暮らしにも余裕がでるのではないかと思う。

また、福岡市の住宅課の方と都心定住のことを話していると、住宅課の方も「私の知り合いにも2人、中央区で都心部に近いところでマンションを買った人がいます。」とのこと。

こういう話を聞くと、やはり、最近の地価の下落によって手頃なマンションが都心部やその近辺で出始めたことが人口定住の引き金になっているようだ、そこで、現在の都心定住の実態を確かめたくなり、少しデーターをまとめてみた。

●都心部の外縁部で人口は増えているようだ。

ここでは都心エリアとその外縁部まで含めての人口動向をみている。（表－2）

平成11年度は住民基本台帳であるが、福岡市が独自に国勢調査ベースの推計人口を算出しているので、中央区のみの人口動向をみると、平成2年から平成7年までの人口は減少傾向にあったが、平成11年は約8,000人の増加となっている。

昭和60年から平成11年までの5年毎の小学校区別にみると、都心部エリアでは高宮校区、警固校区、美野島校区のみが増加しており、あとは減少傾向にある。増加の著しいのは都心部周辺部であり、特に平尾校区、当仁校区、小笹校区あたりである。

ここで言えることは、福岡市の都心部では依然として減少傾向にあるものの、その外縁部エリアで人口が伸びているのである。

また、中央区の転出入の状況を平成8年（平成7年10月～8年9月までの1年間の移動）と平成11年（平成10年10月～11年9月まで）の比較でみると、15～24歳の若者は転入超過者が増えているのであるが、5～9

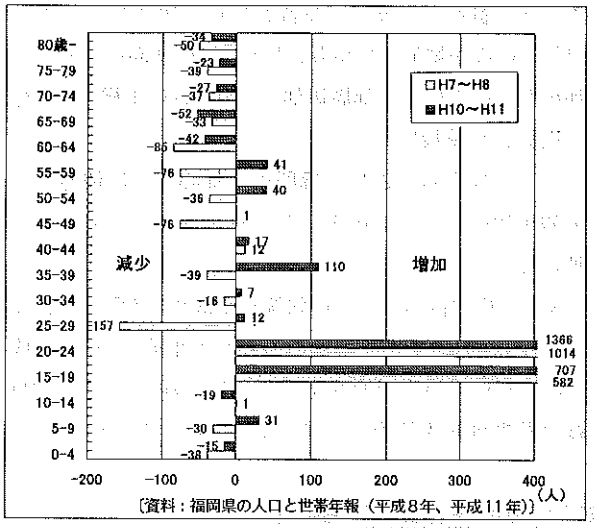
表－2 都心部及び周辺エリアの人口動向

		昭和60年(国調)		平成2年(国調)		平成7年(国調)		平成11年(住調)		傾向
		人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	イメージ
都心部エリア		118,999	55,660	113,248	58,833	111,649	64,461	108,471	64,641	
中央区	大名	7,317	3,608	6,026	3,289	5,339	3,157	4,702	2,987	↘
	簀子	7,907	3,670	7,584	4,023	7,503	4,320	6,760	4,076	↘
	警固	12,022	5,658	11,888	6,427	11,623	6,619	12,205	6,929	↘↗
	春吉	9,859	5,354	9,104	5,242	9,739	6,460	9,166	6,352	↘
	高宮	8,628	4,039	9,019	4,813	8,539	5,028	8,910	5,339	↗↘
	舞鶴	5,639	2,532	5,454	2,650	4,767	2,521	4,774	2,690	↘
	小計	51,372	24,861	49,075	26,444	47,510	28,105	46,517	28,373	
博多区	冷泉	4,434	2,057	3,558	1,826	3,306	1,885	14,476	8,391	↘
	奈良屋	6,077	2,554	5,961	2,768	5,761	3,018			↘
	御供所	3,347	1,482	2,765	1,366	2,449	1,346			↘
	大浜	3,630	1,721	3,662	1,872	3,599	2,172			↘
	住吉	6,494	3,178	6,124	3,347	6,042	3,610	5,225	3,306	↘
	堅粕	10,020	5,004	8,895	4,780	8,450	4,958	8,112	4,895	↘
	千代	9,276	4,025	8,851	4,433	9,681	5,584	8,479	5,271	↘↗
	東住吉	5,805	2,944	4,835	2,717	4,994	3,166	4,724	2,967	↘
	春住	5,912	2,570	6,916	3,413	6,799	3,749	6,688	3,654	↘
	東光	6,973	2,875	6,407	2,746	6,395	2,999	6,427	3,274	↘
	美野島	5,659	2,389	6,199	3,121	6,663	3,869	7,823	4,510	↗
	小計	67,627	30,799	64,173	32,389	64,139	36,356	61,954	36,268	
都心部周辺エリア		89,333	37,392	91,223	40,967	92,036	44,466	92,403	42,099	
中央区	当仁	10,112	4,517	11,345	5,474	11,610	6,134	12,193	6,426	↗
	草香江	11,500	5,084	12,097	5,767	12,014	6,162	11,289	5,681	↗
	平尾	14,488	6,065	14,769	6,882	15,568	7,799	16,170	8,216	↗
	鳥飼	401	185	437	236	761	386	708	332	↗
	赤坂	9,425	4,053	9,000	4,242	8,346	4,283	8,356	4,414	↗↘
	南当仁	12,700	6,040	13,271	6,809	13,735	7,369	13,259	6,941	→
	笹丘	10,128	4,373	10,127	4,314	10,507	4,775	10,641	4,728	→
	小笹	12,200	4,408	12,209	4,592	12,261	4,876	13,164	2,690	↗
	福浜	8,379	2,667	7,968	2,671	7,236	2,682	8,623	2,671	↗
合計		208,332	93,052	204,471	99,800	203,685	108,927	200,874	106,740	
中央区のみ人口 下段：国調推計		140,705	62,253	140,298	67,411	139,546	72,571	138,920 147,780	70,472	

※ 昭和60 平成2年 平成7年は国勢調査データ
平成11年は住民基本台帳データ（国勢調査より7,000～8,000人の差がある）
地区別は小学校区で区分
平成11年の中央区の国調推計人口（福岡市推計）は10月1日現在の推計値

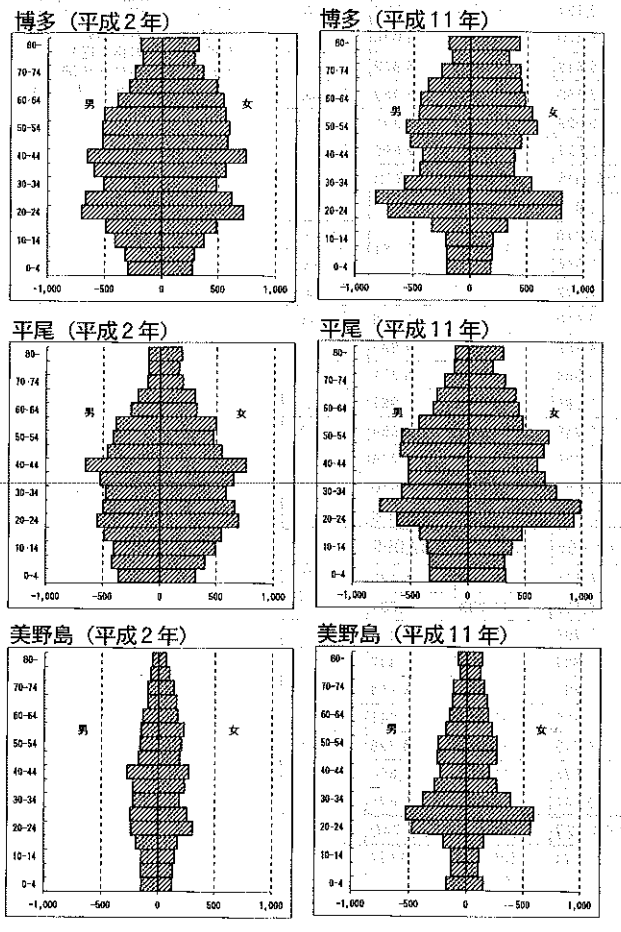
歳と25～39歳で転出超過から転入超過と逆転現象がみられ、ファミリー層の転入者が多くなっていることがうかがわれる。また、注目すべき点としては、60歳以上の高齢者では転出超過の実数が減っており、以前ほど高齢者が転出していないようだ。

図－2 中央区の年齢別転出入超過人口の動向



〔資料：福岡県の人口と世帯年報（平成8年、平成11年）〕

図－3 主な校区別・5歳階級別人口の動向



次に人口増加地区と減少地区の代表的な地区（小学校区）を抽出し、5歳階級別の比較をしたのが図－3である。

減少地区の博多小学校区（通称博多部）では20～34歳までの若者から中年層は増えているものの、0～19歳と35～44歳のファミリー世帯が依然として減少している傾向にある。一方、増加地区である平尾校区では博多部と同様に20～34歳の人が増えており、特に女性の伸びが著しく、女性の街になっているようだ。また、博多部ほどファミリー世帯が大きく減少していないことが、地区全体として増加につながっているようだ。

美野島校区では、同じく20～34歳代とファミリー層が増加している。（平成11年は住民基本台帳であるので、実際、居住している若者はもっと増えていると予想される）

●中央区の分譲住宅着工が半分近くを占める。

住宅の着工の面からみると、平成8年度の福岡市全体に対する中央区の分譲住宅着工比率は約28％にすぎなかったのであるが、平成9年度には約32％、平成10年度には約46％と中央区に集中してマンションが建てられていることがわかる。分譲住宅は戸建ても含まれるので、マンションのみで考えるとその比率が高くなると考えられる。次に、図－4に示しているように都心周辺である大濠・西公園エリアでのマンション供給の状況をみると平成6年頃から供給が盛んとなり、平成9・10年は少し落ち込むものの、平成11年に急激な供給増となっている。平成9～10年で着工が落ち込んだ理由

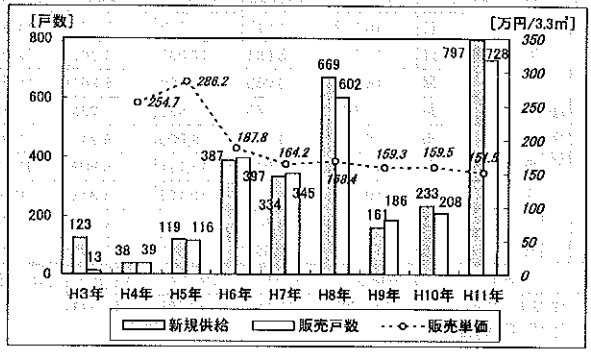
表－3 住宅形態別着工の推移

	平成8年		構成	平成9年		構成	平成10年		構成
	福岡市	中央区	比	福岡市	中央区	比	福岡市	中央区	比
総 計	21,170	3,918	19%	18,909	3,626	19%	19,874	4,916	25%
持 家	3,117	172	6%	2,264	132	6%	2,266	156	7%
貸 家	11,994	1,980	17%	10,579	1,654	16%	12,294	2,413	20%
給与住宅	344	131	38%	464	67	14%	321	41	13%
分譲住宅	5,715	635	29%	5,602	1,773	32%	4,993	2,306	46%

資料：福岡市建築行政概要

図－4 大濠・西公園エリアでのマンション供給状況

（「福岡都市圏の分譲マンションの動向」木村地域計画研究所編抜粋）



をマンション供給に詳しい人に聞くと、この地区で寮や社宅などの土地が売りに出されれなくて、事業化できなかったのではないかとのことである。

●都心部及び周辺エリアでのマンション志向が戸建て需要に影響している。

都心部及び周辺エリアでの公示地価の動向をみるとバブル期以降、一貫して減少しており、奈良屋町ではピーク時の平成4年価格の1／3以下となっている。このように地価の下落と建築施工単価のダウンによって手頃なマンションが供給されはじめたのが、都心部での人口増加の大きな要因ではある、また、戸建て志向から利便性の高い都市部のマンション志向へと移っているともいえる。

長年、福岡都市圏と九州内の住宅供給実態の調査と分析に係わってこられた木村地域計画研究所の代表である木村さんに都心周辺エリアでのマンション供給と戸建て供給動向やその構造などについて、次のような面白い話を聞かせていただいた。

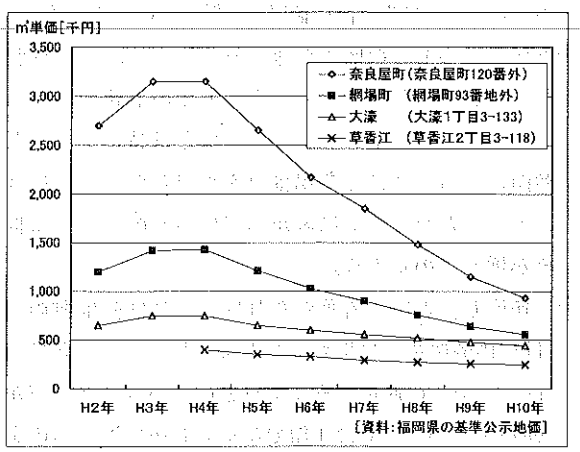
・バブル時には手頃な物件は郊外部しかなかったことから、中堅サラリーマン層は郊外部でのマンションと戸建て志向になった。

・バブル崩壊後の地価の下落によって手頃が物件が都心部の外縁部で供給されたことにより、これまでだったら郊外部に行くべき層が、都心部近くでマンションの購入が可能になった。特に最近の30歳代層は、郊外部での狭い敷地の戸建てとマンションとが同額であるならば、どちらかと言うとマンションを選ぶのではないか。戸建て志向が薄らいでいる。

・都心部や周辺でのマンション供給が盛んなので、最近、郊外部での戸建ての売れ行きがいまひとつである。

・都心部外縁でのマンション販売価格が下がったことから、小笹あたりの少し外縁部でも外側に位置するエリアでのマンションが割高感があって売れていない。今後、このエリアでのマンション販売価格も連鎖的にダウンしてくるだろう。

図－5 都心部・周辺部の主な地点での地価動向



今後、地価はさらに下落していくのではないかと考えられ、さらに都心部及び周辺でのマンション供給は盛んになり、しばらくは若年世帯の都心部マンション志向の現象は続くだろう。

今こそ、ホープ計画のテーマであった「子どもからお年寄りまでが快適に暮らせる都心づくり」を実現するための絶好の機会であり、多世代共住のための積極的な施策展開が期待される。　（やまだ　たつお）

旬のはなし①

～みかんは今～

梶原　里香・尾崎　正利

今年の春、ある人とイチゴの話をしていると「イチゴの旬はいつか知っているのか」と聞かれた。

人を馬鹿にするんじゃないと思った。イチゴの旬はクリスマスケーキにのせられる冬に決まっているはずではないか。「ああ、もう旬は過ぎてしまいましたね」と憮然として答えると、相手は「えっ？」と絶句して、かわいそうにという顔でその話を打ち切ってしまった。事務所で同じことをいうと「きみは無知やなあ。今からが旬やないか」と言われ大笑いされて恥をかいてしまった。

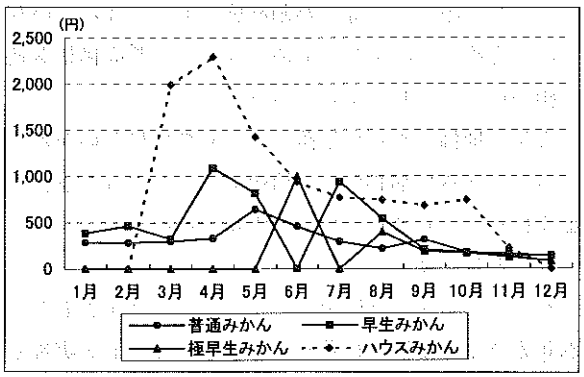
正解は初夏、大体7月頃である。イチゴの旬は冬であるという勘違いをしたのも、結局は7月に八百屋でイチゴの姿を見ないからではないか。事務所で意見を拾ってみると、曰く「虫の来ない冬でないとあんなに大きなイチゴには育たないのだ」、曰く「夏は暑くてすぐ腐るから農家が敬遠するのだ」、曰く「冬イチゴが定着してとても夏には売れないのだ」などという。

その事があって以来、ずっと食べ物の旬について気になって、結局、食べ物の旬はいつなのか、そして販売される量などは季節ごとにどうなっているのか、などをシリーズで調べていくことにした。

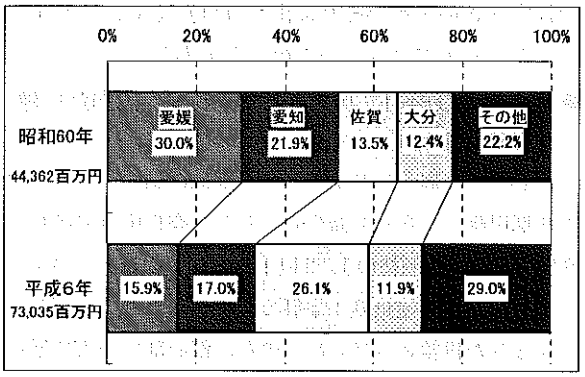
●みかんの旬はいつなのか？ハウスミカンとは何だ。

昨年から仕事で関わっている佐賀県の東松浦郡は、海の幸に恵まれながら、同時に日本有数のハウスミカン

月別のみかんの単価（H11）



みかんの産地別取扱金額シェア



の生産地でもある。「ウチのハウスミカンは全国有数じゃ」という声も所轄の農協あたりで聞こえる。

ハウスミカンは文字通りハウス栽培のミカンのことである。反600万円も要する設備を投資し、徹底した温度管理と大変な手間をかけて、糖度の高いみかんを人工的な環境のもとでつくる。

これと対局にある露地みかんは、昭和30年代から全国各地で一斉に樹が植えられて、40年数経った今になっては、一部を除いて品種替えや作替え・転作などを余儀なくされた産地がほとんどという状況である。

ハウスミカン農家は高収入だという意見も多い。聞くところでは反収300万円、3反で1000万円も生産する農家があるという。やはり販売単価が高いのだ。そして、販売単価の高さの訳が「旬くずし」なのである。本来、みかんは晩秋から新春までだろう（これは間違っていないと思う）。

食品市場ではどういう状況になっているのか調べてみようと思い「東京都中央卸売市場年報」という本を手に入れた。太田市場、淀橋市場、築地市場など最も多くの青果品が集まる市場での取り引きの状況をみてみた。

●他のみかんに比べ圧倒的に高いハウスミカンの単価。

ハウスミカンと他のミカンの市場での状況をみると以下のような特徴がみられた。

①みかん類の中でハウスミカンは桁ちがいに単価が高い。特に平成2～3年は単価が900円近くあった。

②特に夏季の高価格は圧倒的である。理由は夏季は露地ミカンが品薄になるためだと思われる。

③総量・取り扱い金額では、普通みかんが今なお一番だが、15年ほどの間で販売量は2／3に減っている。

④ハウスミカンの全国4大産地は県ごとにみると、佐賀・大分・愛媛・愛知である。大分は杵築、愛知は蒲郡という名産地があり、愛媛は全県挙げてみかん産業の活性化に躍起である。

⑤そんな中、東松浦郡のある佐賀県はかなり健闘しているといえる。

⑥しかし、昭和60年以降、ほぼ5年おきにみていくと、ハウスミカンの市場で登場する時期が徐々に前倒しになっている。「初物は高値」ということでハウスミカンの中でさえ「旬崩し」が起きている。

⑦さらには「4大産地：それ以外の産地」の差がやや狭まっている。金額ベースで昭和60年に8：2であったのが、平成6年には7：3になっている。

⑧平成11年には新規の産地が増えて、単価は下がり続けている。そしてとうとう輸入品が出始めた。

●店の店頭での評判は。

一方、店頭の評判はどうなのか。福岡都市圏の百貨店やスーパーなどに出かけ販売員に聞いてみた。いろいろ話をきいてみたところ、ハウスミカンの売れ行きは以下のような状況である。

①ハウスミカンは本来の露地物に比べ糖度が高く、夏場のミカンとして少々高い値段でも買っていく人が多い。

②みかんそのものの販売が年々減っている。どの作物でも、春夏秋冬の別なくハウスものの品質が上がっている。メロンやナシ、スイカなどは特にそうした傾向にある。昔は「冬場はコタツでみかん」ということだったが、今ではみかん以外のものを食べる機会が増えたのだろう。

③「旬崩し」という言葉があれば、それは産地側の高付加価値農業を目指す姿勢と合致している。昔は旬はどこそこの産地で安くてうまいというイメージが強かったが、今では「旬でなくても旬に近いものを

作れるか」ということが産地間競争のベースになっている。

④高値取り引きされるものは、青果に限らず魚介類でも輸入品とバッティングするようになる。ハウスミカンの場合も韓国産が入ってくるようになって値が下がりはじめている。

⑤百貨店では1kgの化粧箱詰めで5000円、10個入りパックで600～800円である。スーパーでは百貨店ほどでないが、感じとして夏の果物の値段としてはメロン、大粒のブドウなどより割高である。

⑥一応、お中元用のギフト商品にも入っている。

⑦ぽんかん、清見などの多汁薄皮のミカンもハウスものが増えてきた。

いろいろ話を聞いて、実際に家計調査年報で一世帯あたりのミカン消費の変化をみてみると、昭和60年に35.4kg、10,048円（デフレーター）であったのがどんどん減少して平成10年現在では20.9kg、7,514円になっている。ミカンの生食での消費はやはり減っていた。

●これからの産地の行く末を思う。

ハウスミカンの生産と消費は今のところは大体安定しているように思える。少々高くても甘ければ夏でもミカンを買うという需要が生まれている。

しかし、産地が増えてスポット的に高値狙いを目指すところが多くなった分、どうしても相対的に値が下がらざるを得ない状況にある。また輸入品とは価格にかかるコスト面でどのように競合していくのか大いに気になるところである。

ハウスミカンは花が実になるほんの一瞬の手間がその年の勝負の分かれ道という厳しい作物である。気温30～40℃のハウスの中、集中的に作業を投入せねばならない非常に「工業的」な作り方でもある。

こうした生産者の手間や苦労を軽減していくために農繁期にパート労働を導入する農家もいるという。

我々はそうした苦労を分かって食べないといけない。

そう思い、先の東松浦郡の農協から事務所にハウスミカンを取り寄せて、所員に配り反応をみてみた。すると「冷やして食べる方がおいしい」「思ったよりも甘くて食べやすい」「もう少し酸味があった方が飽きがこないのでは」「値段が高いので一人暮らしの人は買うのが難しい」などの意見が出された。私自身も夏の甘いみかんは非常に珍しく、思ったよりも食べやすかったように思う。（かじはら　りか、おざき　まさとし）

＜ひともうけ通信＞

農村の人々と都市の人が、農村集落の中で共生できるのだろうか

―七山村（佐賀県東松浦郡）で楽しい共住を見つけた？―

糸乗　貞喜

（ひともうけ・解題）さる所の集まりで「"ひともうけ"を企んでやってきました」と言って、ちょっと睨まれ、顰蹙をかったことがある。性根の悪い私は弁解も説明もせずにその場を済ませてしまったが、しばらくして、睨んだ人から「人もうけっていいですね。今後私もこの言葉使わせてもらいます。」という楽しい便りをいただいた。本音を言えば、金を儲ける才がないので負け惜しみで言っているのかもしれないが、結局の所はモノやカネではなく、蓄えの本質は「ひとづきあい」につきると思う。いわゆるネットワーク社会と言うことでもある。今号以降、この仕事を30年やってきた中での「人もうけ」について書かせていただこうと思う。今回は「七山村のちょっと面白い話」。次回は大阪の堺出身で、大分県大田村在住の築島さんの「大都市から国東周辺に110世帯移住させる世話をした話」。

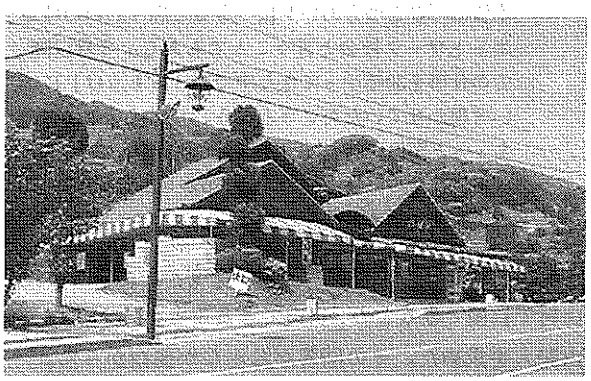
七山村のまちづくりのためのアンケート調査で、「七山村で自慢できるもの、自慢できること」について、自由記入を求めた。その回答がなかなか面白かった。

この村は福岡の西で唐津の手前にある人口2,800人の村である。ここの農産物販売所「鴨神の庄」は年商2億6千万円を誇っている。ここの出荷登録者数は450人余で、そのうち100人が60歳以上の人となっている（1995年）。もちろん一家に老夫婦と若夫婦の二口とか、さらに子供も登録して夏休みにカブトムシを出品するので三口とかいうのもある。この施設が多くの人の自慢の種になっている。

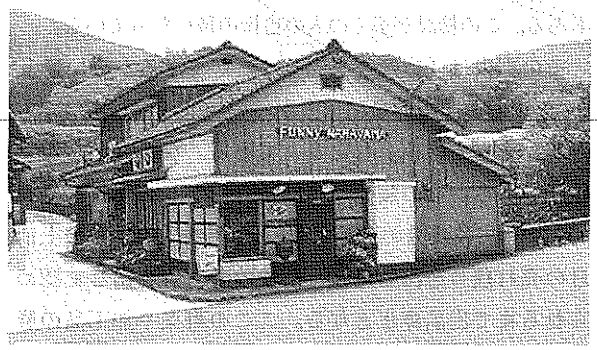
その理由は「農産物を売ることができるからいい」、「少しのものでもお金になるからいい」、「少しずつでも貯金ができていい」などなどである。なかなかしたたかでもある。この販売所は品質管理がしっかりしていて、すべてに自分の名前とTEL番号を入れ、その上前日の売れ残りを出したら、以後改善方針を出して認められるまで出品停止となる。ここの野菜や加工品の鮮度や品質も自慢の種である。

もう一つ、変わった「自慢」をお知らせしたい（もちろん他にたくさんあるが、それは割愛）。アンケートの書き込みの中に、「ファニー七山が友人達に好評」、「ファニー七山のマスター・ママがとてもいい人」、「フ

ァニーはよそからも人を集めている」などという変なものが6〜7点あった。ファニーというのは、七山村の中心に近いあたりにある喫茶店である。別にfunny（こっけい、おどけた）ではなく、古い店舗付きの仕舞うた屋を借りて福岡へ通勤していたのだが、「ここに住みたい」と思って素人仕事で店を改造し、喫茶店をはじめた。DIYで買ってきた材料でカウンターを作ったりしたのだが、「へたなのでニスが何度もはげて塗り直していたので」何となく古びたいい雰囲気が出ている。昼の12時から夜の0時まで開いているまっとうな店である。昼食とコーヒー、それに酒（日本酒、焼酎、洋酒）も出すが、マスターもママも酒は一滴もやらないので、「高歌放吟のような雰囲気にはならない。お客さんがリードして終業時間も守ってくれる」という話であった。



鳴神の庄。ここのラッシュアワーは、土・日の朝8時から10時頃である（週日も開いている）。農産物の新鮮さには定評がある。加工食品はみんなの手作りで、ここで売れるようになって、高齢者から若い婦人層にコンニャクや漬け物などの手作りの知恵が受け継がれるようになった。高齢者にとっては、自分が評価され、収入にもなるのでゲートボールより面白く、そちらの人口が減っている。



ファニー。普通の仕舞うた屋を素人仕事で改装して喫茶店を開いた。七山村は、来てみて気に入ったので、空家を借りて福岡へ通勤していたのだが、いっそここで好きな喫茶店をやってみようと思ってはじめた。アンケートに書いていただくほどの店ではないが、ありがたいことです。（福岡の天神から筑肥線の浜崎駅まで65分〜75分、浜崎駅から七山村の中心までは9キロでバスは一日に3〜4回）

私も長い間、まちづくりのお手伝いをしているが、こんな書き込みのあるアンケートは始めてである。農村集落で都市の人たちが住まうには、農村に合わすのでも都市を押しつけるのでもない、お互いの持ち味を提供し合う仕組みができそうに思えた。

8月中旬に糸島郡志摩町でシンポジウムがあり、そこで都市住民の農村集落への移住（いわゆる地家人と新住民の話）がテーマになった。「若い人に来てほしい」「地元の共同作業などには参加しない人たちには来てほしくない」など侃々諤々の大討論になった。この件は次号で。　（いとのり　さだよし）

地域もどこと付き合えば
プラスになるか考える時代に 5

よいことをする地域には よい人が集まる“なぎさの伝習所”

尾崎　正利

●タダは甘えのはじまり。

地域に賑わいを引き寄せるために、自治体の中には丸がかえで田舎体験やモニターツアーを開催するところもある。目的は観光ルート開発、定住促進、花嫁募集など様々あるのだが、タダにしてどんな人でも来さえすればいいかとなると問題だ。

「タダだから来たのだ」
「タダでここまでやるなら金を出せばスゴイはずだ」
「同じタダならば他の方がまだ良かった」
「タダだからどうせこの程度なのだ」
「タダでやってあげているのに文句を言うな」

これらは全てタダゆえの来手と受け手の双方の甘えだと思う。これに加えて「どうせ国から獲った補助金でやっているから、まあいいよ」などと言えば、元の目的や地元の創意工夫などはどこかに飛んでしまい、自治体は翌年から毎年金出しを期待されるようになる。

観光でも定住でも花嫁でも、地域が人を呼ぶ場合は相手は人。全て“人がらみ”である。だから相思相愛にはなれなくても、素顔のままの人柄（地域柄）を知ってもらえれば、何かと身近な気持ちで接してもらえるのではと考えている。

本誌の今年の新年号（45号）で紹介した長崎県鹿町町（しかまちちょう）の「なぎさの伝習所」は、素顔のまま地域柄を出していくことで、身近に感じてくれる人を増やしている地域だ。

「なぎさの伝習所」は毎年夏に都会の子ども達に町内の民家に4泊5日のホームステイをさせて、町内に住む大人や鹿町町に縁のある人が、それぞれの仕事や専門分野を生かして、ワークショップ（以下WS）といって、漁師の暮らし、自然探検、焼き物や友禅和紙を使った工芸、シーカヤック遊びなどを伝える学びの場をもっている。

都会の子どもたちだけでなく、町内の子どもも半数参加しており、最近は自分の住む町に誇りを持つようになってきた。

昨年10月、私は平成11年度の実行委員代表であった松原年孝さんのお話を聞く機会に恵まれ、11月に現地を訪れた。そして今回、開催中の様子をみる機会を得た。

●大人の一生懸命さを子は見て育つ。裏方役で頑張る子どもたち。

私は7月29、30日に鹿町町を訪れた。今年で第8回目を迎えた「なぎさの伝習所」は80名の子ども達が参加して7月26日から30日まで5日間開催されており、私は最後の2日だけお邪魔した。

今年の実行委員は7名。今回お世話になるのは、地元で郵便関係の仕事をされている実行委員会事務局長の林範仁さんと、地元でまちづくりグループの活動をなさっている実行委員の須藤達夫さんのお二人だ。

ちょうど私が実行委員会の本部がある文化会館に着いたのは、子ども達はレクリエーションで海に出ていた時だったのでゆっくりお話を聞くことができた。

今年の「なぎさの伝習所」の様子、参加した子ども達の反応を聞いてみると、林さん、須藤さんからは以下のようなお話があった。

・ホームステイのホスト家では子ども達をお客さん扱いしないことを原則としている。最近は食べず嫌いの子どもが多いが、ホスト家ではそんなことは言わせないという気合いをもって一生懸命に食事を出すと、よく食べるようになり、結局はみんな好き嫌いを直して帰っていく。

・ホスト家では毎年2～3人を受け入れている。第8回の今年は80名参加。このうち町外の子がホームステイする。毎年、ホスト家が固定化しないよう、町の広報などで広く呼びかけている。

・WSのコースは参加申し込みのとき、第1～3希望まで出せるが希望通りにならない子も多い。子どもは気持ちを早く切り替えて順応するのが早い。むしろ親の方が必ず電話をかけて「なぜうちの子が」と言ってくる。公平に分けた結果ですと必死に説得してなだめることになる。

・WSのコースの中に「お坊さんの修行体験」があり、これに3年連続で希望する変わった子もいる。今年は期間中にたまたま法事に出る機会があったので、子ども達を連れていくと、いつになく神妙な顔をして座っていたという。

・今の子どもは生まれて以来ずっと親が世話して暮らす日々を過ごしてきたので、ホームステイや他人の家に泊まるのが初めてという子も多い。ホスト家での3日間でホームシックになり、家に電話をかけさせてくれと泣きつく子もあるが、親の声を聞くと泣いて後のWSに支障をきたす。こうした甘えを乗り越えさせるためには、取り次がない方がいい。

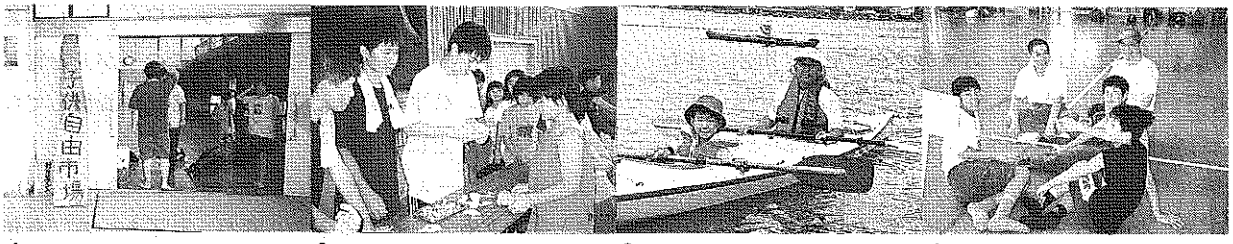
・参加する子ども達は小学4年生から中学3年生まで。この時期の子どもは人間の生涯の中で、一番体格差がつく。だから大きい子は小さな子の面倒を見ようとするし、小さい子も大きい子を真似しようとする。毎年、甘えったれの子どもが伝習所を境に少し大人びた風になったという手紙を親御さんからもらう。

・今回もシーカヤックのWSに参加した子どもたちは真っ黒に日焼けしている。小学4年の女の子も体力の限界に挑戦し10の無人島探検コースを漕破した。

・実行委員会は7人だが、ホスト家、WSのスタッフ、婦人会、老人クラブ、生活改善グループ、駐在所など様々な人が力と知恵を出してサポートする。誰かに任せて後は知らないといったことは絶対に起きないようにしている。

・参加費は町外からの子どもは4泊5日で2.1万円（ホームステイ費1万、WS参加費1万、保険1千）、町内の子は自宅通いで6千円（WS参加費5千、保険1千）である。町外参加者の親から高いと言われることはなく、町内からは高いといわれる。

・「なぎさの伝習所」が8年前にスタートしたとき、地元のパソコン教室や無線クラブなどを母体とする町おこしのグループ活動が実行委員の前身であった。40～50代が実行委員の中心であるが、この世代は産炭地時代（S30年代で人口2万人超、現在は6千人弱）の賑わいとその後の町の衰退の双方を知っている。町の賑わいを最も切実に望む世代である。



1.　2.　3.　4.

1．4日目の午後「子供自由市場」の会場には、各ワークショップに参加していた子ども達が全員集まってくる。各自が大事にしている宝物やワークショップで作った作品などの市がたつ。 2．「これは3点だなあ」「そんなに安いの？」値段をめぐる攻防。市での値ぶみの一コマ。NNP（ニューなぎさプロジェクト）のメンバーが完全に取り仕切っている。 3．北九十九島のシーカヤックのコースは全国的に有名。小学4年のこの子も泣き言は言わずに頑張った。 4．お坊さんの修行を体験した子ども達。3年連続体験に来ている子もいる。

・そうした大人達の姿を見て、地元の子どもたちが裏方役をやりたいとNNP（ニュー・なぎさ・プロジェクト）を作って参加している。以前、参加したことがある子ども達が、今度は大人達のマネをして運営の潤滑油の働きをしている。

●身内を甘えさせないのは運営面の甘えを出さないため。

「身内を特別扱いしてはいけません･･･」と林さん。何のことか聞いてみた。町内でも人気がある「なぎさの伝習所」には募集を上回る参加希望が毎年集まるため、抽選で参加者を決めているが、時々困ることがあるという。ホスト家として受け入れに快く応じてくれる家があって、その家の子どもが「なぎさの伝習所」に参加希望を出したが、抽選の結果、選にもれることもあるらしい。実行委員として結果を伝えた上で、ホームステイの打ち合わせを進めるのはつらい気もする。「ホスト家の子どもは無条件参加でいいじゃないか」という意見も中にはあるという。しかし、そうなると町外から参加する子ども達と別の基準をつくることになってしまう。子どもたちを預かる以上、運営に決して甘えを出さないために公平さを徹底する方針は第1回目から一貫している。ちなみに先の家の場合は、ホームステイを予定通り受け入れて、その家の子どもは裏方参加している。

●クワガタ人気。子どもの自由市場

文化会館のフロアをのぞくと子ども達の「自由市場」の準備に取りかかっている。中学生のNNPのメンバーが説明する。ルールは次のようになっている。

①あらかじめ用意してきた「自分の宝物」をNNPのメンバーに見せる。NNPのメンバーは値踏みして紙でできたコインを宝物と引き替えに渡す。

②コインは持ってきた物の価値によって1～10まで種類があって、数字の大きいものほど価値ありである。コインの数字を書いた紙を品物に貼って、市場に並べる。これが品物の値段になる。

③参加者がみんな持ってきた「宝物」を市場に並べ終わると、手にしたコインと同じ数字の好きな品物をもってNNPのレジ係にコインを渡し取引成立。

並べられた品は、おもちゃのネックレス、WSの中で自分で作った積み木、自分で獲ってきた木の実、携帯のゲーム機、マンガ本、マグカップなど様々だ。子どもが80人だから品物も80種以上並んでいる。男の子の人気はクワガタ（6匹）や竹細工でそれぞれ紙に"8"と値がつけられている。結構いい値だ。女の子の人気は料理の本やブローチなどである。携帯ゲーム機は機種が古かったのか人気が集まらなかった。

面白かったのはNNPのメンバーの値ぶみの様子である。高く値づけさせようとする子どもとのやりとりが白熱する。人気アイドル歌手のカードを持ち込んだ子どもには「売れ残ったらちょうだいね」などと目配せして意外に高い値を付けている。「お父さんに以前買ってもらいました」という唐津焼の湯飲みを持って来た女の子には「軽くて飽きない色だね。お父さんに怒られないかな」など話しながら3点をつけた。

この辺の裁量はNNPに任せられている。値段や市場の進行にも大人の実行委員はあまり口を挟まない。

かつては参加者の立場で関わった子どもたちが、今では裏方の楽しみを感じているようで、頼もしく思えた。

●実行委員が倒れないように、様々な人がサポートして問題解決にあたる

林さん、須藤さんのお二人が私をスタッフの皆さんに紹介して下さったおかげで、いろいろな話を聞くことができた。以下、断片的にまとめてみた。

最後の夜、公民館で揃って夕食。婦人会の皆さんの手料理をいただく。好き嫌いがなくなったという女の子。

最終日、別れの集いでは、参加した子どもたち全員が自分の成果をみんなに報告する。少し緊張している。

山下実さんは「鹿町やまと太鼓」の主宰だ。過去20年間近く、地元の小中高生を中心に太鼓のチームを育成し、過去に延べ100人ほど育ててきた。今年は長崎県太鼓協会と共催したマレーシアへの遠征ツアーに鹿町町内の中高生と一緒に参加し、帰国は「なぎさの伝習所」の2日目。帰国翌日から実行委員のサポートに参加しておられる。今年、中学生の男の子3人がマレーシア行きのメンバーに入りたい一心で連日遅くまで練習し腕を上げたそうで、そのことを大変喜んでおられた。

石田光洋さんは潮音院の副住職で「お坊さんの修行をしてみるWS」の担当だ。今回は座禅、読経、座禅、写経、掃除、精進料理などを参加した4人の子ども達と一緒に取り組んだ。たまたま法事があったが、4人をぞろぞろ連れていくと意外におとなしかった。石田さんは「体験したことがない仏事の“取り仕切り役”としての役目に何か感じ入ったのかも」と話す。

熊谷厚生さんは元中学校の先生だ。「地元で教えて、地元で引退した先生」として、子どもだけでなく、大人のことも良く知っていて町内の人気者だ。「わら草履を編む・身近な材料で遊び道具を作るWS」では子ども達にナイフを一本ずつ渡し、思い思いに作らせた。「ナイフの使い方を学ばせることで、人に向ける道具ではないということを自ずと知るのでは」という。

実行委員の周りにはこうした方々が常に出入りしては、意見をつきあわせて現場に散っていく。誰かに決定を委ねて待っているような人はいない。

実行委員会は毎年12月に発足され翌年7月の開催まで正味7ヶ月かかって準備する。その間、ホストファミリー募集、WS参加者募集、参加者募集、全体構成とスケジュール管理、予算確保、各種団体の協力呼びかけなどを進めていく。

開催前の実行委員にとって頭が痛いのは、あと一ヶ月になっても、確としたものが固まらない状態が長く続くことだという。というのも参加者の募集期間は6月末から7月上旬までなので、参加者名簿も人数の割り振りもはっきりとは決まらないのだ。人数が確定すれば今度は猛烈な準備作業にかかるという。

そうしたときに心強いのが、毎年やってきて様々な局面を切り抜けてきたケーススタディの蓄積だという。「問題になる所は前もってつぶす」「問題は一人任せにしない」（須藤さん談）ことが実行委員を支える強力な力添えになっている

●子ども達と雑魚寝体験。私の伝習所体験。

今回、私は皆様の御好意に甘えて昼食から夕食、さらには宿泊までお世話になってしまった。実行委員代表の宮木朋子さんから「泊まっていけば雰囲気が分かって、今からでもなぎさの伝習所を体験できるわよ」とありがたいお誘いを受けたのだ。

子どもたちは最終夜、ホストファミリーの家を出て町内の公民館やデイケアセンターなど5箇所に分かれて最後の晩を過ごす。各施設には実行委員の担当者が泊り、事故がおきないように番をする。

私は加勢地区の公民館で、須藤さんと実行委員代表の宮木朋子さん、長崎国際大学1年生の女の子2名と一緒に過ごすことになった。私を以前案内して下さった松原さんも遊びにきておられた。子ども達は総勢16人。

最後の夕食は加勢地区の婦人会の手作りで、混ぜご飯、肉じゃが、盛り鉢、ピザである。WSの講師、アシスタントなどスタッフが混じり、背の低い長テーブルにズラリと並んで座る合宿スタイルで食事をとる。

私は子供たちに「お兄さんもお坊さん」といって頭をぺたぺた触られた。昼の間、本職のお坊さんと話し込んでいた様子をみられたのか。確かに本職よりも私の方が髪は短いことは認める。

子供たちの寝場所の支度をして消灯したのち、隣の部屋でビールを囲んで話をした。実は出発する前、実行委員の代表に女性を据え、副代表と会計も女性で、女性が大変頑張っている実行委員会だと聞いていた。実行委員代表の宮木朋子さんは40を過ぎて今春開学した長崎国際大学の1期生で福祉の勉強にいそしんでいる。ここに来ている学生スタッフはみんな宮木さんが引っ張ってきたゼミの同級生だ。1周り以上の年の差を感じさせないほど仲がいい。

宮木さんと同級生のやりとりをみていて何となく分かったような気がした。想い入れのある人、良いことをやっている地域は、強い“磁場”のようになって人を引きつける。「なぎさの伝習所」の当初の目的は「子ども達の世界を拡げよう」「鹿町を舞台に知恵や文化の伝習をしよう」という単純なものだ。

その目的に合う人、賛同する仲間がどんどん集まって運営されている。手伝いのスタッフの人もみんな「よかったよかった」と言っている。里帰り以上に「なぎさの伝習所」が大事だという人もいた。

実のところ私は今回一度もサイフを開かずにちゃっかりと食事を3回、風呂、寝場所、ビールと、いただいてばかりである。そのせいか「鹿町となぎさの宣伝をしっかりたのみます」と宮木さんにハッパをかけられた。

鹿町町では昨年から誘致企業が撤退するなど雇用情勢が悪化している。今年の開催準備の中でも「遊びごとよりも仕事をせい」という意見も家庭内では若干ながらあったという。しかしそんな中でも地域の光を失わないために「なぎさの伝習所」を続けようして頑張った地元の人の熱意は立派だと思う。だから今後は、日常的に稼ぐ仕組みづくりを考えねばなるまい。

子ども達は最後の夜だから寝ずにはしゃいでいる。おしゃべりにカードゲームに興じているが、時々、大人の部屋をのぞきに来ては何かと甘えてじゃれていく。ここでできた友達と手紙を交換する約束をしたり、秘密の宝物を見せ合ったりして、密やかにお別れの準備をしている子もいる。少ししんみりとして一人で名残惜しそうにしている子もいる。この子たちが明くる年にたくましくなって参加し、来年は下の子達の面倒をみるのだ。

大人の部屋ではビール片手に、これからの鹿町の産業、観光、歴史談話、人づくりの話、学生さんの進路相談など話は尽きずに夜は更けていった。

（おざき　まさとし）

「カッホー馬古屏」の元気の秘訣

～第64回地域ゼミ～

梶原　里香

福岡県嘉穂町にある農産物直売所の「カッホー馬古屏」。1999年5月号の「よかネット」で一度ご紹介しているのでご存じの方も多いと思う。今回の地域ゼミは、この「カッホー馬古屏」のオープンからずっと携わっておられる嘉穂町役場の在田修三さんにその成功の秘訣と今後の課題などについてお話ししていただいた。

●美味しいお米を北九州から買いに来る

「カッホー馬古屏」の11年度の販売構成は、野菜28％、米20％、商工製造品21％、花卉類10％、農産加工品8％、果樹4％などである。フルーツの町としてアピールしている割には、ここでの果樹の売り上げは少ない。商品はすべて嘉穂町でとれたもの、加工品については嘉穂町で加工されたものと限定している。平成9年4月にオープンして今年で4年目。年を追うごとに来客数、販売額ともに増えており、今年も今の調子でいくと昨年の実績（来客数32万3千人、販売額4億5千万円）を上回りそうであるという。

中でもお米の販売の伸びが激しい。毎年約60％ずつ売上が増えており、今年はお米の販売額だけで1億円を超えそうな勢いだそうだ。「嘉穂の米はおいしい」という評判は定着してきており、ほかの販売所に差をつけている。今年4月のオープン記念日には、1日だけで2.5tのお米が売れた。お米は北九州から買いに来る人が多い。一度にたくさんの量を買って帰るのではなく、5kgずつなどこまめに買いに来るそうだ。

ここのお米は玄米の状態で売られており、買った人は精米をしてもらわなければならない。精米すると最初の量から約1割減ってしまうが、お客さんはそれでもいいとおっしゃるそうだ。

●週1回の休みも返上

「カッホー馬古屏」の営業は、盆と正月を除いて年中無休である。昨年まで毎週火曜日が定休日であったのだが、今年から火曜日も営業するようになった。

売れ残った商品はその日のうちに引き取りに来るように、出荷する組合員に伝えてある。しかし実際は、翌日の朝商品を出荷しに来たときに売れ残った商品を持って帰る人が多い。火曜日が定休日となると、売れ残った商品を月曜日の夕方までに取りに行かなくてはならなくなる。そのため、組合員が月曜日の出荷量を手控えるようになった。

平日でも、お昼を過ぎれば店内に並ぶ商品が少なくなり、組合員の方にお願いして途中で持ってきてもらうこともあるくらいだから、最初から品数が少なければ当然お客さんから文句がでるし、客足も遠のく。そういったこともあって、今年から火曜日も営業することとなった。このことも今年の売り上げの増加に影響を与えているだろう。

●「カッホー馬古屏」の抱える課題とは

最近は農産物直売所が増えている。嘉穂町の近くでも山田市、筑穂町、稲築町などに農産物直売所があり、穂波町にあるジャスコには産地直売コーナーがある。こういったライバルにどう対応していくかが大きな問題である。

また出荷者に高齢者が多いため、5年後に今と同じだけの出荷量を確保できるのか、行政頼りになっている「カッホー馬古屏利用組合」をどのようにして独立させていくか、組合員数が400人を超えたことでだんだんと狭くなってきている施設をどのように拡充していくか、などといった課題を抱えている。

●元気の秘訣は

最後に在田さんは「カッホー馬古屏」の元気の秘訣についてこうおっしゃった。

「みんな金儲けが好きだということ。儲けてみるとおもしろかったということで、みんながもう一度野菜作りに一生懸命になったと思う。」

お金儲けをおもしろいと思い、それがいい野菜作りにつながった。その結果農家の方には楽しみと収入を、嘉穂町にはお客さんを呼び寄せた「カッホー馬古屏」。課題もあるようだが、それらを解決して町民に、そしてお客さんに喜ばれる場所であり続けてほしい。

（かじはら　りか）

地域計画のための一知半解事典⑪

要介護率は本当に1割なのか

伊藤　聡

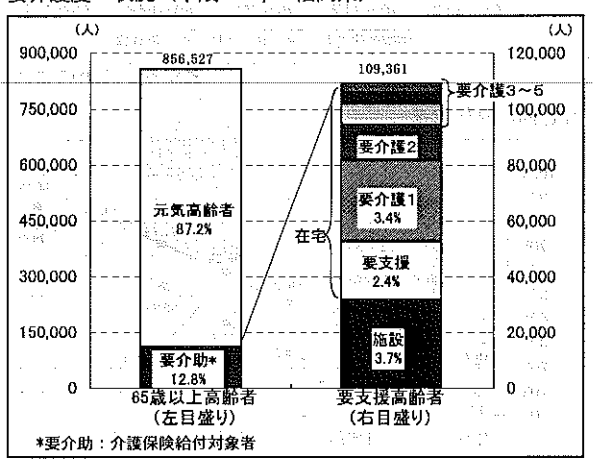
平成12年4月より介護保険制度が施行された。介護保険の利用は、1割の自己負担が高齢者には結構重いため思ったほど伸びていないようだ。民間の福祉サービス提供業者などは思惑が外れたようだが、保険事業の側からみれば破たんせずにすみそうだという気分もあるだろう。

この介護保険の給付は、ケアマネージャーによって要介護度認定を受けた人が対象になるが、65歳以上の介護保険給付対象者率は福岡県で12.8％となっている。内訳は施設介護が3.7％、在宅のうち比較的軽い要支援が2.4％、要介護1が3.4％、ほとんど寝たきりの要介護5は0.4％である。

「国民生活白書」（経企庁：平成10年版）では「不安に比べて少ない要介護者の発生率」という小見出しで、年齢別にみて80～84歳で生存率52.5％、要介護率10.0％、85歳以上では生存率33.3％、要介護率20.5％であり、要介護者の発生率は意外と少ないのだということを厚生省のデータを元に述べている。

これらのデータをみていると、自分が要介護状態になる確率は1割程度であるように思える。40歳以上の被保険者は、1割のリスクのために保険料を支払うのだろうか。あるいは、住宅関係の調査をやっているとリフォームの話が大きく出てくるが、1割の確率のためにリフォームすることを勧めるのだろうか。

要介護度の状況（平成12年：福岡県）



資料：福岡県高齢者保険福祉計画

しかし、まわりをみると自分の祖父は数年間要介護状態だったし、そのほかの知り合い関係でも何人か痴呆や介護状態になっている。10人にひとりや8人にひとりという感じではなさそうだ。

そこで見つけたのが、死亡前数年にさかのぼってどのような身体状況であったか、というデータ（人口動態社会経済面調査：厚生省平成7年）であった。これをみると、死亡する1年前に自立生活ができなかったのは35.1％、すでに寝たきりだったのは17.2％、死亡1か月前では自立生活できなかったが71.7％、寝たきりは53.8％である。先ほどの要介護率1割の話とはずいぶん違う印象を受ける。

ひとりひとりの要介護となる確率は、この死亡前の状態から判断するのが正しいだろう。人が死亡する確率は何歳まで生きるかに関わらず100％であるわけだから。

データの50％のラインを、半数の人に起こりうる確率として捉えると、死亡前の6ヶ月近くは自立生活が出来ない要支援の状態、1ヶ月程度は寝たきりとなることになる。つまり、要介護になるリスクはかなり高いのである。リスクに差があるとすれば、長期化するかどうかの問題になる。

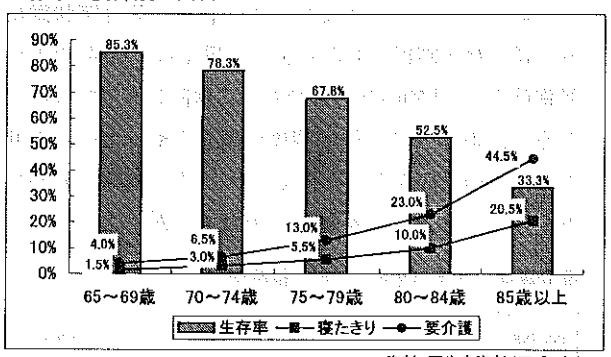
要介護者の発生率が1割程度だという話は、時間を断面的にみた場合である。言い換えると、ある瞬間に65歳以上高齢者数の約1割が要介護状態にある。その1年後もほぼ同じくらいの割合で要介護状態の人がいるのだが、そのうちの多くは死亡するなどの分が入れ替わって、新たに要介護となった人である。

福祉政策的にみれば、要介護者の発生率は常時1割程度ということで十分だろう。（ただし、後期高齢者の割合が上昇すると要介護者率も上昇する。）しかし、自分自身のこととして考えると要介護となる確率は1割どころではないし、配偶者や親がそうなる可能性を含めると、介護はほとんどの人が身近に体験するはずである。

これでようやく実感とあってきた。介護保険料の支払いも1割の人のためではないし、住宅のバリアフリー化もそれで誰かが助かる可能性の方が高く、多くの人に推進していく意味があるのである。

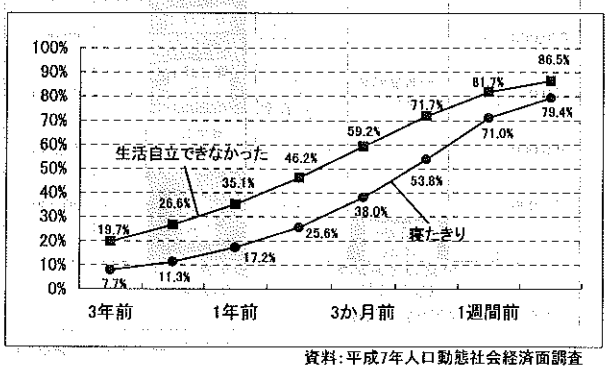
ちなみに、この死亡前のデータからもうひとつ読みとれるのは、死亡前日に寝たきりだったのは79.4％、ということはポックリ死ねる人は残りの約2割ということである。（いとう　さとし）

生存率と要介護の割合



資料：厚生省資料（平成9年）

死亡前の身体状況



資料：平成7年人口動態社会経済面調査

地域を変える障害者2

全ては施設入所の障害者も外に出歩きたいという要望から始まった「外出サポート倶楽部サルク」と「自立生活センターちくご」

澤谷　真紀子

さて問題です。「さるく」とは何でしょう。この言葉の意味がわかるのは福岡県南部から熊本県北部の地域にゆかりのある方だと思います。正解は、「歩く」が変化した方言で、「歩いて回る」とか「外出する」という意味です。

今回は、「サルク」という名の障害者・高齢者の移動・外出をサポートする「外出サポート倶楽部サルク」と、介助サービス、相談、ピアカウンセリング等を行っている「自立生活センターちくご」を紹介しようと思う。

●自立生活センターちくご

これまで行政が提示する福祉サービスに自分たちのニーズを合わせていた障害者が、障害者のニーズにあったサービスを障害者が提供していこうという目的で平成10年に結成されたのが自立生活センターちくごだ。ここでは、障害者が地域で自立した生活を送るために必要なサービスを提供している。また、当事者である

障害者を中心とした約10名が、事務局スタッフとして活動している。

自立生活センターを利用する人は年会費3000円（賛助会員2000円／年）が必要となる。

主な事業の内容として次の５つがあげられる。

○ピアカウンセリング：障害を持つ仲間同士でカウンセリングを行い、自分の障害を受け入れ、自信を取り戻し、地域での自立生活へとつなげていく精神的なサポートを行う。

○自立生活プログラム：自立生活の為に必要な対人関係、金銭管理、制度の上手な活用など、生活のノウハウをプログラム化しグループ、又は個人をサポートする。

○相談・情報提供、権利擁護：介助・住宅・福祉用具など日常的な悩みや相談に応じると共に権利擁護の活動を行う。情報誌「ゴザール」の発行、インターネットによる情報発信も行う。

○在宅福祉サービス：身体介助・外出介助など365日、多様なサービスに応じる。同性介助を基本とし利用者の自己決定を尊重したサービスを提供する。

・一ヶ月あたり約400時間の供給
・利用者は１時間当たり1000円を支払う。内１割がセンター、９割が介助者へ支給される。
・介助者の資格は問わないが、面談を行い、障害者の自己決定を尊重できそうな人にお願いしている。
・同性介助を基本としているが、男性の介助者が少ないことが問題としてあがっている。

○社会参加支援：自立への第一歩である外出をサポートするために、車いすのまま乗れるリフトカー等によるドアツードアの移動サービスを行う。

・サルクに登録している会員は、利用会員が100名運転協力者が50名。
・利用会員は１時間当たり750円の協力金と30円／kmのガソリン代を支払う。内150円／時をサルクの事務費としている。
・サルクのリフトカーが２台あり、年間40万円／台の維持費がかかる。（日７～８時間程度の利用は必要となる）
・最近は高齢者の通院需要も多くなってきている。

電動車いすもそのまま乗り込めるサルクの車

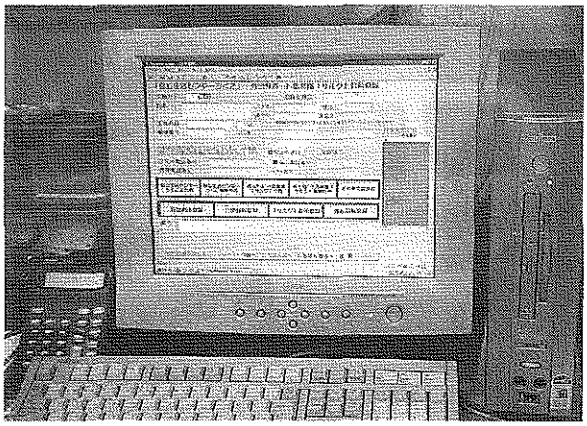
自立生活センター ▶
ちくごの概要

●サルクができるまで

サルクができた経緯が興味深い。これは、東さんのこれまでの歴史と重なっている。

東さんは22歳の時に趣味のロッククライミング中に事故にあい、下肢に障害がある。現在、車いすをかろやかに乗りこなしている。その後、職業訓練校に通い、10年間印刷の仕事をしていたが、一方で障害者の当事者運動に力を入れていた。当時の当事者運動は行政に対する要望や要求が中心であり、もっと自分の障害を生かせるようなことを自分でしたいと考えていた。その頃、アメリカのIL（Independent Living＝障害者の自立生活）運動のリーダーが北九州にやって来た(1983年)。アメリカのIL運動に感化された日本の障害者の間で自立生活支援を目指したグループが地域で出来始めた。東さんは施設に入所している友人と３人で自立生活支援を目指した。

とはいうものの、最初は３人で合って世間話をするだけだったそうだ。しかし、その話の中から、施設に入所している人の外出したいというニーズが、車や介助



利用者と運転者・介助者のしっかりしたデータベースを活用して効率的な作業を行っている

者等のバリアによって実現されにくい、ということが大きな問題としてあがり、このニーズにこたえるかたちで移動サービスを行ってみた。

現在、サルクは有料の移動サービスを行っている。サービス開始当初はボランティアで行っていたが、無償ではサービスを行う側も受ける側も続かないことがわかり、会員制の有料のサービスに改めたそうだ。

サルクのサービスは当事者のニーズを把握した所から始まっている。問題を解決するためには何が必要かを考え、そのための手段は、実際にやってみて問題点を解決するためには...と問題把握、企画、計画、行動、検証を行っている。小回りがきくところがサルクの強みなのだろう。

●自立生活センターちくごNPO法人を取得

自立生活センターちくごは、5月にNPO法人を取得した。

法人格を取得した理由としては、今がんばっている人がいなくなったらなくなるサービスではなく、次の世代に受け継ぐためだ、ということだ。これと同じことをNPO法人を取得した代表の方に聞いたことを思い出した。これまでは、収入、収出、税金等の全てが代表者個人の名義で行われ、自分が倒れたときに対応ができないという心配があったが、法人格を取得することで、次に引き継ぐことができるという安心感が生まれたということだった。

現在、NPO法人自立生活センターちくごでは筑後市よりバリアフリーマップの委託を受けている。地域に対する問題意識が高く、住民の視点で解決策を提案できると判断されたのだと思う。我々のようなコンサルタントもいらなくなる日が近いのかもしれない。

（さわたに　まきこ）

自分達の住んでいるまちを　もっとよく知ろう
～いなつき再発見～

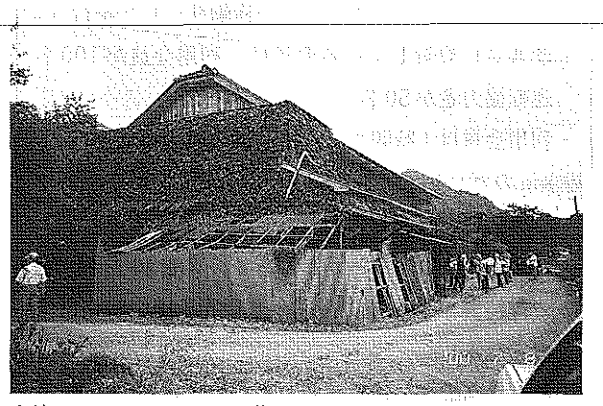
小田　好一

稲築町でのまちづくりの集まり「Jump Upいなつき稲築の未来をつくろう会」が結成され、前回のよかネット（46号）に掲載した「大人があそぶ会」に続く第二弾は自分たちの住む稲築町をもっとよく知ろうということで「いなつき再発見」が開催された。参加者は20名ほどであった。数時間で歩いて回れる範囲をピックアップしているので今後も何度か続きそうである。まずその第1回である。

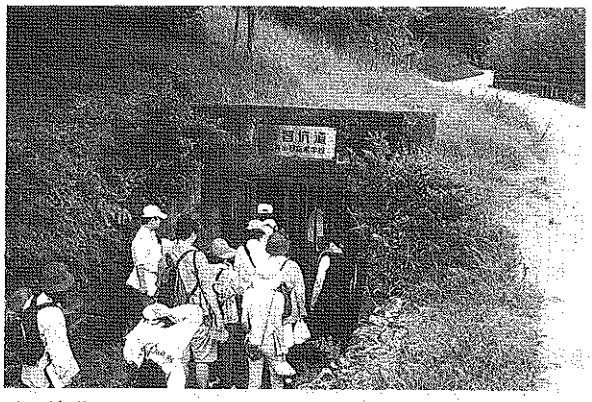
●炭鉱最盛期の町のにぎわいを今に伝える炭鉱クラブ

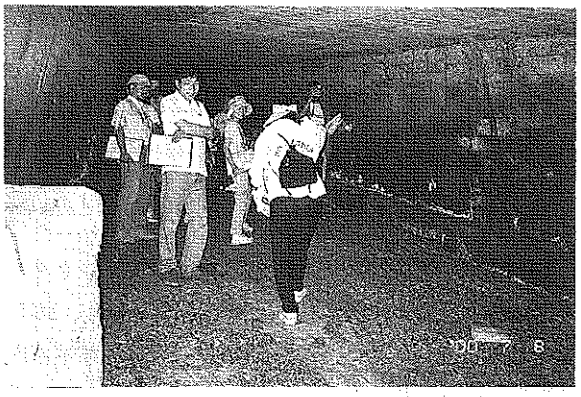
去年の冬、「鉄道員（ぽっぽや）」という映画があったのは記憶に新しいと思う。そのなかに、ここ筑豊地区出身の炭坑夫の役として出演していた某タレントが「故郷（筑豊）に帰る」という設定（タレント自身は筑豊出身ではない）でバラエティ番組が放映された。その番組はほとんど稲築町で収録された。私はその番組を見る前からこの町の仕事を担当していたが、番組のなかで初めて見る3つのものがあった。一つはここで紹介する炭鉱クラブである。かつての炭鉱全盛期に社交ダンスなどのパーティーが行われていたそうだ。町内の人も知っている人は少なかった。

番組ではかつての炭鉱最盛期のにぎわいを取り戻そうと、その建物でカラオケ大会や某タレントのコメディショーを行っていた。この建物は炭鉱住宅地区の高台の上に建っており、周囲の炭鉱住宅からも炭鉱クラブのにぎわいがうかがえたと思われる。番組ではこの



炭坑クラブは夏はツタが茂っていて形がよく分からないが、とにかくボロボロである。


練習坑道の入口から、おそるおそる入ってみる。


練習坑道のなかは、ただの真っ暗なトンネル。ちょうど背丈より少し高いくらいの高さである。

建物をライトアップしており、とてもかっこよく見えた。しかし、現実はひどいものであった。

木造であるこの建物は壁も屋根も柱も荒廃しており、雨漏りもひどく実際には雨もしのげないほどのひどさである。歴史的建築物の活用に興味のある私はテレビでこの建物を見たとき、即座に観光資源、産業遺産として活用を思い立ったが、このひどさでは言葉も出なかった。活用するにしてもおそらく新しく建てた方が安いのではないかと思われる。しかし、私は何とかしたいという思いはある。

●かつて炭鉱マンが養成された練習坑道

先述の番組のなかで初めてみたものの2つめは、練習坑道である。

町内には石炭最盛期に鉱業学校なるものが存在していた。鉱業が花形産業であっただけにこの学校にはエリートが集まっていたそうだ。その学校附属の採鉱実習場として昭和32年から3年間かけて学生達が実習をかねて手造りで建設したものである。また、この施設では採鉱実習のほかに坑内爆発や坑内火災にそなえて、災害救助活動の訓練にも使用されていた。やがて石炭産業の衰退に伴って、同校が閉校。その後は救助活動の訓練にのみ使用されたが、昭和48年以降、この門は閉ざされたままとなっている。

町が管理しているこの坑道の門のカギを開けると、門扉は錆ついて、少ししか開かなかった。入ってみると石炭の運搬の練習に使われていたのであろうかレールのようなものと、トロッコと木枠があった。その先は真っ暗である。足下を懐中電灯で照らしながら30mくらい進むと今度は登り坂になった。あまり先に進んでも特に何があるわけでもないので、10mほど登ったところで引き返すことになった。ここで一度全員の懐中電灯を消すことになった。「本来の炭鉱の中はこうです」との説明があった。たかが40m進んだだけだが、途中で坑道が曲がったため、全く光が入ってこなかった。何年も炭鉱に入っているとこの暗さに対する恐怖心はなくなるのかな、などと考えながら坑道から出てきた。

この練習坑道については少し整備し、より多くの人にかつての石炭産業を肌で感じられるような取り組みをしてみてはどうかと思うが、管理面で工夫が必要である。

番組で初めて見たものの3つめはボタ山の熱で沸く温泉である。温泉といっても、バラックで作った個人用の風呂のようなものだった。これは町内には存在しないそうで、実物は見ていない。

●美しい景観と眼下に広がる不法投棄

町の周辺には丘陵が取り巻いている。そのなかでも比較的高いものに隣町へ抜ける道路があり、その道路沿いからの眺めが良いということなので、ひたすら坂道をみんなで歩いた。なるほど、道路の頂上付近になると町全体が見渡せた。この町は町名にもあるように稲作が盛んである。町の中央部分はほとんどが水田である。夏のこの時期（7月初旬）は稲の緑が非常に美しく、おまけにいい風が吹いて心地よかった。

しかし、目をすぐ真下に移すと、とんでもない光景が広がっていた。不法投棄のゴミの山であった。車でゴミを持ってきてガードレールから投げ捨てるのであろう。この丘陵地は、稲築町でも広葉樹などの自然のままのところが残っているのであるが、ゴミの不法投棄ははなはだ残念である。

いろいろな発見のあった今回の「いなつき再発見」だったが、今後も続く（だろうと思う）、このイベントに期待したい。　　（おだ　こういち）

地方分権について考え、歴史の重みにふれた２日間

～地方シンクタンク協議会報告～

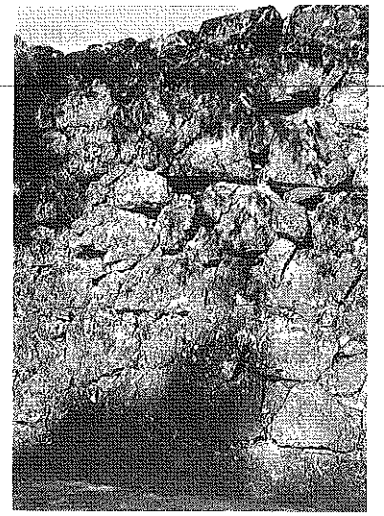
梶原　里香

7月18日、19日の2日間、熊本市で地方シンクタンク協議会の九州・沖縄ブロック交流会が開かれ、18日は「地方分権」をテーマにした講演、19日は熊本市内の視察という日程でした。

●地方分権についての講演会

18日の講演会は、熊本県立大学教授の片岡勒氏を迎えて、「分権改革時代とシンクタンク」というテーマで講演会とディスカッションが行われました。その概要は以下のようなことです。

・地方分権は今まで何度もいわれてきたが、今回は法律ができ、委員会ができたという点ではきちんと動いていた。国を主体とした改革という面が強いが、地方自治体にとって良いように変わるのではないかと期待しているし、地方自治体もそれを望んでいる。
・これまでの地方自治体は予算をとるのに一生懸命で、後のことよりも次の年の予算にむいていたと思う。これからはとれた予算をどう使ったか、それがどのように住民のために使われたかが大事になる。
・市町村の大半は地方分権を請け負うだけの能力がまだ十分ではなく、受け皿を強化しなければならない。そのためには、人材とシステムを拡充（合併など）する必要がある。
・これからの地方自治体は、地方分権により競争時代にはいる。当然、分権が進む自治体もあれば進まない自治体もでてくる。中にはつぶれる自治体もでてくるであろう。
・地方自治体は地方交付税に頼りすぎている。この姿勢を改めない限りはどうにもならないのではないか。
・これからは中央省庁が引っ張っていく時代ではない。地方自治体が引っ張り、行っていることをバックアップしていくことが中央省庁の役割である。



原因不明の出火で焼けてしまった石垣

●楽しみにしていた熊本城

翌19日の熊本市内の視察は、熊本城、フードパル熊本、植木町にある平田機工にいきました。

お寺や城、遺跡などを見て回るのが大好きな私は、中でも熊本城に行くのを一番楽しみにしていました。熊本城は平成19年に築城400年を迎えるということで、それにむけて熊本城登城ルートの復元にむけて整備が行われている真っ最中でした。また1万円以上寄付をした人は「城主」となり、「城主証」が発行されるそうです。

特に印象に残ったのは熊本城の石垣で、石の表面が割れているところもたくさんありましたが、西南戦争で鉄砲が撃たれた跡ではなく、西南戦争の3日前に原因不明の出火によって本丸御殿が消失したときに割れたものだそうです。その石壁をまじまじと見つめながら、その火事の焼け跡が今もこうやって残っていることに感動しました。

●工場をつくる工場

午後から訪問した平田機工は、様々なメーカーの生産設備の製造をしている「工場をつくる工場」です。工場を構成するには①コンベアー、②ねじを締めたり、物を真ん中に寄せるための自動機、③寛容性のある産業用ロボット、④部品供給、⑤コントロール（制御装置）の5つの要素が必要で、平田機工はこの5つの要素をすべて提案する会社です。世界的に見てもこういうシステムラインを作る会社は少ないため、世界約40カ国から注文を受けているとのことでした。

●女性は私1人

今回の熊本での会議に出席していた女性は私1人だけで、年齢の近い人は1人だけでした。夕方の懇親会でどなたかが「若手といったらだいたいみんな30歳代ですからね」とおっしゃったのが強く記憶に残っています。こういった会議には、若い人はなかなか参加できないのかなとも思いましたが、もっと積極的に若い人が参加できる雰囲気になるといいなと思いました。

あまり熊本市内や思ったよりも広かった熊本城をゆっくりと見て回ることができなかったので、改めて熊本を楽しみたいなと思っています。（かじはら　りか）

お隣台湾の伝統的建造物の保存・活用事情

山辺　眞一・小田　好一

歴史的建築物や町並みの保存・活用が全国的に展開されているが、お隣の台湾でも日本統治下の建築物や寺社仏閣、住宅などの保存活用の動きが活発になってきているようだ。國立臺灣科技大學で中国・台湾建築史を研究されており、以前、日本に留学していた王惠君副教授がコーディネートされた、「日本歴史建築活化再利用考察團（團長中原大學建築系教授薛琴氏）」の九州・北海道を視察するツアーのうち、福岡県内を案内することになった。

このツアーは台湾政府が歴史的建築物の活用の先進事例を視察して台湾国内の保存活用に活かす目的で募集されたもので、構成メンバーは、台湾の大学の先生を初め、台湾文化庁職員、保存活用を推進する自治体、まちづくり団体の代表の方などであった。

その一行の日程は非常にハードである。8／4：夜福岡着、8／5：福岡市内見学→吉井町→佐賀市、8／6：佐賀市→有田→長崎市、8／7：長崎市→湯布院→別府、8／8：別府→臼杵→福岡、8／9：福岡→札幌、8／10：札幌→小樽、8／11：函館、8／12：函館→大阪、8／13：大阪→台北着である。この日程のうち吉井町を案内することになった。

●台湾の伝統的建造物保存活用の現状

ここで、なぜ、京都や奈良など古い町並みの多く残る都市を視察対象にしなかったのか、この他、台湾の保存活用の現状について、王先生に話していただいた。

・九州は台湾と気候がよく似ており、台湾での保存・活用の参考にしたかった。
・台湾でも日本と同様、保存活用には維持管理費がかかり、その場でお金を落としてもらう仕組みをつくるなど考えないと保存活用は難しい。
・台湾の伝統的建造物は木造がその多くを占めるが、防災対策のため、木構造の周りを煉瓦で囲ったものが多い。そのため、通気が悪く、湿気が高いというシロアリにとっての好条件をつくりだしてしまうことになる。しかし、このシロアリの成長を止める脱皮防止剤により、ほとんどのシロアリを退治することができる等であった。

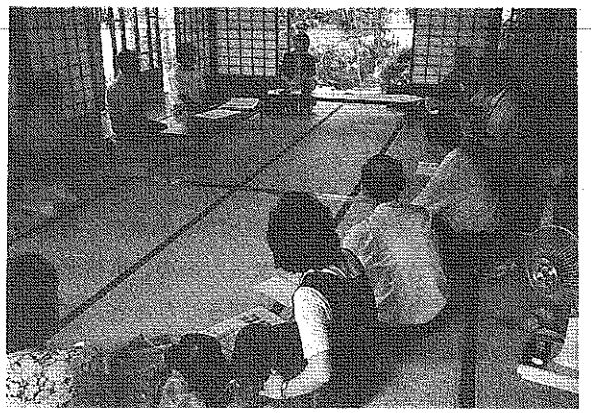
●町並み保存団体の国際交流

私は王先生とツアー前からＥメールでやりとりして日程を練っていた。まちづくり団体との交流会を強く希望されていた。8／5の午後に、このツアーの目玉であるまちづくり団体「町並みを良くする会」との交流が福岡県吉井町にて実現した。吉井町は国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）に指定されている。伝統的建造物（以下、伝建）を取り巻く吉井町の現状は以下のようになっている。

・高齢化率が28％となっており、伝建に住んでいる人にも高齢者が非常に多く、子どもは東京、大阪、福岡など大都市に移住し、戻ってくる予定がないところが多い。子どもが戻ってこない家にお金をかけて修理するかということが問題になっている。
・伝建地区内の伝建は、そのほとんどが町家で道路に面して建っている建物であるが、駐車場を確保するため、道路からセットバックさせて住宅を新築している例がみられる。
・町の人口が減少し続けており、地区内の空家も増えてきている。

以上のような現状をふまえて、台湾側から吉井町へ出された質問項目は以下のようなものである。

Q：伝建を活用したまちづくりのPRはどのように行っているのか。
A：PRは特に行っていない。イベントなどが行われる際に、テレビ、ラジオ、雑誌などのメディアを上手に利用している。特にお金はかけていない。町内でイベントがたくさん行われているが基本的にそれらに



交流会は町が民間から買い上げた伝建「居蔵の館」で行われた。

も補助などは行っていない。まちづくりは民間すなわち自分たちが動かないと進まない。行政は原則的にバックアップに徹し、あれこれするのは良くない。

Q：伝建指定の同意を住民の9割から得られた（吉井町が）ということだが、どのようにして同意をとったのか。（台湾でも伝建制度のようなものがあり、なかなか話が進まないところもあるという）

A：吉井町は元々、町に対して誇りを持っている人が多く、みんなで力を合わせて町並みを良くしていこうという気運が強かった。自分たちの町並みはみんなで協力してきれいにしようという考えが強い。このため、比較的容易に同意がとれたのだと思う。

Q：若い人は伝建に対してどのような考えを持っているか。

A：駐車場が自由にとれない、伝建は大きい間取りでクーラー等の空調が効かない、現在の経済状態では、維持管理が難しいなどのマイナス面を感じている人が多いが、最近では吉井町のアイデンティティを感じてくれる若い人もいて、Uターンも見られる。

Q：町に観光客が多く来れば、そこで生活する人にとって環境が悪化することもありうる。そのあたりのことをどう捉えているか。

A：吉井町を訪れる観光客は、観光バスでガイドさんについて回るようなものは期待していない。2人くらいで、ぶらっと歩いてもらうまちをイメージしており、土産物など買い物で利益をあげるようなまちは考えていない。「住みやすくて楽しいまち」「住みたくなるまち」になったらいいなと考えている。

このほかにも様々な意見交換があり、予定時間の2時間はあっという間に過ぎた。質問の内容から、台湾も歴史的建造物について維持管理、後継者についてなど日本と全く同じ問題や課題を抱えているという印象を受けた。この視察や交流会がどこまで視察団にとって参考になったかは分からないが、何かのきっかけになれば、と思っている。

●どうやって経営しているのですか

8／8、薛団長以下16名の視察団が、糸乗に、有田の話などを聞きたいということだったので、事務所に来られた。最初に、みなさんと挨拶をしたあと、有田の陶磁器の発祥から、現在にいたる話、伝統技術と歴史的建物を生かして、もてなし型の観光地づくりを進めたいという話などを糸乗から説明した。

これが終わって、コーディネーターの王先生から、この会社のことを紹介してくださいという注文があり、この商売の始まりから、現在に至るまでのコンサルタント業の説明を行い、さらに機関誌「よかネット」のことや、知恵のネットワークづくりのことなど当社が普段行っている活動の説明を行った。

説明後、団員の方からの最初の質問は、「会社の説明を聞いていると、うまくいっているようだが、どうやって経営しているのか？」という質問がでた。思わず糸乗と私は顔を見合わせてしまったが、会社の稼ぎの方の話をほとんどしなかったので、何でメシを食っているのかが、不思議だったようだ。ちゃんとそれなりの商売もしているということを答えたが、「営業はどうしているのか」「行政から補助金がもらっているのか」など、会社が成り立っているのが不思議だという印象だったようだ。さらに、よかネットパーティのこと、この機関誌のこと、人のネットワークを大事にしていること、そして、今回の視察団の方々との出会いをはじめとして、こういうネットワークを大事にすることが、経営につながると思っていることを話して、みなさんようやく納得されたようだ。

最後に、王先生から、「実はこのメンバーはそういう人のネットを大事に活動している人たちで、今度は台湾で交流しましょう。」という申し出もあった。歴史的資源の活用をテーマに訪日された調査団だったが、人のネットワークの大切さを確信された面持ちで、団員のみなさんは事務所を後にされた。

（やまべ　しんいち、おだ　こういち）

農業日記2000夏……いとしまつうしん

糸乗　貞喜

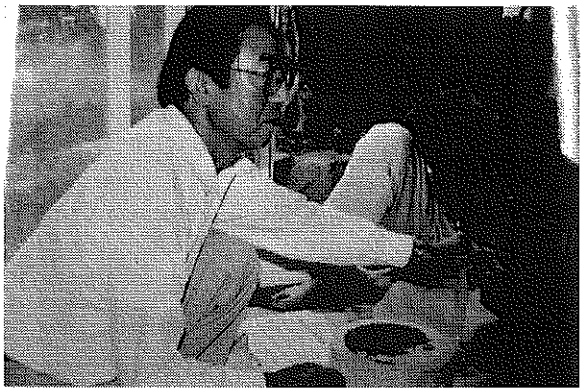
○話はひろがり、成績は落ちる

今年になって北海道の種ジャガイモを、東京経由で送ってもらった（田中かおりさん＝からげちゃん）。鬱金（うこん）も沖縄から送っていただいた。飯村さんの差し金である。

種子島紫という、中が紫色のサツマイモの苗も送っていただいた。これは天神で飲んでいるときに出た話で、鹿児島の山口さんの手配である。

今年のジャガイモは、雨と草の成長と手入れの不行き届きと虫の発生が、まことに旨くマッチして惨憺た

蕎麦は蒔いて2～3週間でこんなに白い花が咲く


石臼で蕎麦を挽く

る出来になってしまった。雪国生まれの小生にとって、鬱金は「とにかく植えてみるか」といった作物で、すぐ芽が出てこないので心配だったが、全員見事に顔を揃えた。あとで聞いてみると（石垣生まれの西表さん）、「鬱金なんて丈夫なモノで、けっ飛ばしても芽は出ますよ」ということのようだが、無知ということは知らないと言うことだ。種子島紫は朝顔の葉っぱのようだが、至極順調。

○蕎麦の話をひとくさり

この5月27日の“よかネットパーティー”で、蕎麦を35人前ぐらい打った。蕎麦粉は、私が種まきから石臼で粉挽きまでやったものと、ミャンマー北部の高原地帯でとれたものである。評判はもちろん私の手作りの方がよかった。

とりあえずミャンマー蕎麦の説明をすると、山岳地帯で作られている芥子の代替作物として日本から蕎麦の種を持ち込んで作付けしたものである。その蕎麦が「アジア麺文化研究会」のルートで入ったので打ってみたという次第である。

正直に書くと、ミャンマー蕎麦は香りというものがまったくない。日本人の蕎麦に対する思いの大半は“香り”であるのに、それがないということはかなりの欠陥である。これがうまくいかないと、折角のミャンマー北部高原地帯の輸出作物づくりが失敗に帰することになりかねない。

こんなことを考えながら、先の日曜日にわが畑の草取りをしていて、気がついたことがある。私の借りている畑は、5月中頃以降蕎麦の花盛りになっている。畑の草取りという仕事の中に、草としての蕎麦刈りがかなり含まれている。

気がついたことというのは、ミャンマーの蕎麦は「夏蕎麦」なのではないかということである。私は田舎育ちであるが、夏蕎麦は作らなかった。飢饉でもないと作らないようにみられていた。夏蕎麦は、蕎麦の粉というだけで、香りもなく、少しえぐいものだったように思う。

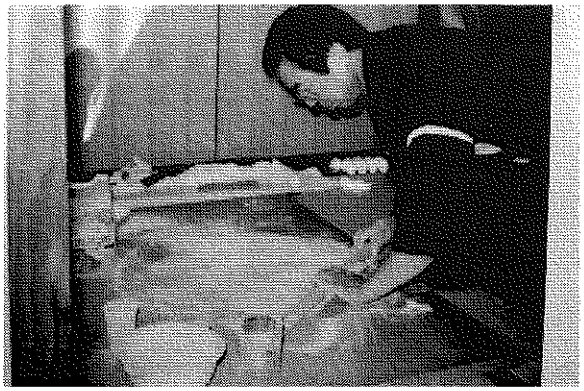
もし夏蕎麦だったとしたら、このミャンマーの事業はうまくいかないように思う。「文句を言わずに、かわいそうなんだから買ってやればいいじゃないか」という意見が出そうに思うが、それではミャンマーにとって商品開発にはならない。それよりもミャンマーの秋のような時期に、作付けするように指導できないかとも思った。

話を私の蕎麦に戻さねばならん。

昨年、一昨年と1.5反（1,500㎡）ぐらい作った。一昨年は50～60キロ穫れたが去年は15キロぐらいしか穫れなかった。その理由は九州北部が秋の長雨にたたられて、実りも悪く、収穫時をのがして、ボロボロと畑にこぼしてしまったからでもある。収穫の時、唐箕（とうみ）で吹き飛ばした籾（しいな）が固まっているところなどは、一面の蕎麦の花盛りで白い絨毯のようになっていた。それでも一応15キロあったので、五回ぐらい打ったが、まだ3キロぐらい残っている。石臼で粉にするのが一番大変だ。

○「ほかに何を作っていて、全部でどれくらいの面積をやっているんだ」という質問がきそうだ。そこらあたりの解説をしよう。

今の日本では、農業をしようとすれば一応5反（5,000㎡）以上の作付けを、しなければならんことになっている。ということなので、5反の畑を貸していただいているが、これは巨大な面積だ。梅雨ともなると、毎日数センチも草が伸びるように思える。



パーティー会場の隅で蕎麦を打つ、道具を一式持って出前です

やむをえず「激励主義の農業」と称して、始めに鶏糞とか牛肥とかを少しやって、あとは手が回る範囲内で草取りをすることにしている。しばしば草に追い越されて、消えてしまう作物も多い。というようなわけで、葉ものなどの手間のかかる作物は作れず。いわゆる根ものを作っている。サツマイモは成績がいいが、ジャガイモは虫にやられて葉っぱが網のようになったりして、なかなか難しい。ほかに里芋、黒豆、トウモロコシなどを作っている。なにぶん、激励（草取り）が不足気味で、農薬も化学肥料もやらないので、どれだけ穫れるか分からない。今年も蕎麦を2反ぐらい蒔くつもりでいる。

○今後の予定……蕎麦蒔きは9月9・10日

蕎麦を9月の上旬に蒔くと、5日後ぐらいに赤い足をしたかわいい芽が出ます。9月下旬には白い花の絨毯が出来上がります。その頃に去年の蕎麦粉で私の手打ち蕎麦でも……と思っています。

・9月上旬　蕎麦蒔き（手助けしてもいい方はtelを092-731-7671、092-327-2477へ）
・9月下旬　蕎麦の花見と蕎麦食べ（冷蔵庫に入れたりして味が落ちないようにしています。手助けしてもいい方は同上）
・10月20日頃　サツマイモ堀りと加也山にかかる月を見る（この頃黒豆の枝豆がうまい）
・11月上・中旬　特に種子島紫は遅くなる
・11月下旬　蕎麦刈り
・12月中旬　新蕎麦を食べる

（いとのり　さだよし）

「よかネット」への御意見、近況などを皆様に寄せていただきました

No.45号、No.46号に同封していたハガキで、様々な御意見、近況などが寄せられました。ここでその一部を紹介します。

■高蔵寺ニュータウンに土地を求め、雑木林をつくり、小さな畑を耕し、丸太小舎を建てて25年たちました。この“時をためて手にした私たちの住まいを、＜大地に還る住宅（サスティナブル・ハウジング）＞競技設計に応募しましたら、なんと「グランプリ・建設大臣賞」をいただいてびっくり。決して若いとは言えない75才と72才の夫婦ランナーズが、一般参加で、フルマラソンに優勝したみたいに胸をはずませています。この上は、「メッキがはがれるまで／前進あるのみ／よ」（バーバラ・カートランド）と、ユーモラスに開きなおるしかありません。「どんな暮らしなの？」と私宅を訪ねる方々がめっきり増えました。そのおもてなしも楽しみです。皆様もどうぞ。

2000・5・10＜チーム・風と土＞からの報告

（愛知　津端修一）

■小生は、生まれたての「正に小さな学校」の職員の1人ですが、アルパック時代におしえていただきましたことの「情のないところに情報は伝わらない。情があって初めて報告が情報」になることを毎日のように痛感いたしております。毎号、情がある生きのいいネタをありがとうございます。

ところで、反省会の内容に一言ご提案を申し上げます。よかネットパーティーの準備、開催、後始末の企画から運営を、外部の人も参加させるシステムにしてはどうでしょうか。うまいものを持ち寄ることで十分に外の人がうまいこと参加している訳ですが、もっと当日に社員の1人1人が表のホスト役になれるような工夫が可能だと思います。（福岡春日市　伊集院豊麿）

■5月のゴールデンウィーク信州へ撮影に出かけました。今年は例年になく雪が多く、桜、ゴブシ、水芭蕉と春爛漫の季節が雪の中で、春景色より冬景色でした。スキーヤーで賑わうゲレンデ、駐車場もレストランもホテルも満席で不況など感じられませんでした。特に観光バスは中高年旅行者でいっぱいでした。人口800人の世界文化遺産白川村は8千人で身動きも出来ない悲鳴

で農地はゴミの山で、被害を受ける農家と利益を上げる土産物店、飲食店との対立が表面化し、村長も頭が痛いとのことでした。10月11日（水）～15日（日）に福岡市美術館ギャラリーで小生の写真が展示されますのでご覧下さい。（兵庫　高橋久栄）

■5月からFMとやまの「アクセス21」という新番組に水、木曜日パーソナリティとして出ています。放送時間は13：00～15：55です。富山においでの際は聞いて下さい。9月末までは続けます。（富山　遠藤聰）

■毎回楽しみに拝読させて頂いております。昨年秋の久留米大学の「第4回社会経済国際シンポジウム」への参加し、現在新たに「中国・社会科学院哲学研究所」の滕頴（とうえい）教授（日本名、藤原素子）との交流が芽生えて居ります。同女史は「中国孔子基金会」の理事をされており、来年4月に開催される「孔子像三体対面」のイベントにも何らかの形で参加出来そうで、今から若干意気込んでいるところです。（柳川市　平川硬一）

■4月から「北九州博覧祭」を担当することになりました。来年7月4日～11月4日、JRスペースワールド駅前で「ジャパンエキスポ北九州博覧祭2001」を開催します。1901年官営八幡製鉄所が創業以来100周年の記念すべき年、そして21世紀の幕開けの年の北九州市における大イベントです。（北九州市　丸山野美次）

■本年、3月4日「道の駅豊前おこしかけ」をスタートさせました。売上げは当初予算の50％位で順調ですが、4月22日に5Kmしか離れていない「道の駅しんよしとみ」がオープンしました。この影響がどうでてくるのか…まだまだ先行き不透明です。来駅者へのアンケート調査をして確たる戦略を練って地に足のついた経営をしてゆきたいと考えています。（福岡豊前市　白石道雄）

■リタイアして5ヶ月経ちました。タップダンス、ソフトボール、水泳等で体力づくり、料理教室、パソコン教室、美装教室で楽しみながら「街づくり研究会」から引継いだ“うらしま太郎も含めて高齢者在宅福祉、障害者外出介助等のボランティア団体「どんTAC」の運営に目が廻りそうです。子育て支援も研究中です。（福岡春日市　松本隆幸）

■3月12日に「長崎コーポラティブ住宅をつくる会」を立ち上げました。入居予定者であるとともに、コーポラティブ住宅づくり支援者でもあるという立場です。4月、5月と月1回づつの集まりをもっています。いまのところ30名余の会員で、とりあえず長崎市に第1号をつくって、県下各地に拡げていこうと、勉強と行動を始めました。見学会やワークショップなどを企画しています。（長崎市　鮫島和夫）

■昨年は荒尾市での研修有り難うございました。その後貴誌に掲載していただき重ねてお礼申し上げます。本年3月に「九州わんわん王国」がオープン。ますます元気を出している荒尾市です。どうぞまたお越し下さい。（熊本荒尾市　古林哲也）

■岡山県蒜山に山荘を造りました。出来るだけ自然（天然）の素材を利用しています。知的障害者（児）の家族に使ってもらおうと思っていますが、自然が好きな方は誰でもOKです。ただし周辺整備の手助けもよろしく。（兵庫　森井章二）

■「まちのよそおいネットワーク」2000年3月24日に、資金も人手もない中、住まい・まちづくりのNPO法人として旅立ちました。今年度は2つの重要テーマがあります。1つは、山と海を結ぶ河川に着目して循環型地域づくりについて検討することです。2つ目は、住教育、環境学習をベースに総合的学習について検討することです。両事業とも助成を受けており、住まい・まちづくりのNPO法人としての真価が問われるところです。機会がありましたら「よかネット」紙上で活動等について紹介させていただけたらと思っています。（山口市　東孝次）

■会社の名前が変わったお知らせ、いいですね。あいの会目下介護保険走り出して5月ホームヘルプ450万円、ケアプラン37万円、デイサービス60万円、547万円の実績です。NPO法人とは名ばかり銀行もお金貸してくれず、回転資金、個人持ち出しでしのいでいます。がんばります。（北九州市　石井カズエ）

■住専処理、民間金融機関への公的資金投入等に続き債権放棄、殊に国の関与する“そごう再建策で公のコスト即ち納税者の負担の極小化論ともう一方のモラル・ハザード論が議論の軸に再登場しています。その際モラル・ハザードは“やる気をなくさせる意で使われることが多いが、“社会主義・公正・ルールの守られなくなるリスクの意でももっと考えられねばならないと思います。どんなに社会的にコストが増大しても取締らなければならない犯罪があるのと同様、税負担が増えても負け組の処理は公正に行うべきだという意見もあ

りえるはずだと考えた次第です。　（東京　佐藤正憲）

■停年1年前から生涯スポーツのホースシューズ（馬蹄投げ）をアメリカから導入し協会を作り始めた。素朴で単純な鉄の輪投げだが、難しいので、一人前になるには最低10年はかかる。皆さんも始めてみては。試合後のビール最高です。　（東京　魚谷忠司）

■現在、（財）星のふるさとも星の文化館、茶の文化館、22haの公園管理に加え、池の山キャンプ場（ロッジ、コテージ30棟）と星野温泉・池の山荘が財団に加わりました。今後はこれらの施設に集まられるお客様を地域の中に送り込みたいと考えています。　（福岡星野村　坂元英俊）

■4月から隣町の江迎町の無農薬農家・味菜自然村で始められた「いのちの農場」に参加しています。25組50名の応募にビックリしました。　（長崎鹿町町　松原年孝）

■有田の街にとって最大のイベント“有田陶器市”今年は好天に恵まれ全国からの有田焼ファンに賑わった。報道によれば96万人最高の入出。29億の売上げとか。たしかに通りは人、人、人であふれたが！その後の有田の街並には人影がなく訪れる観光のお客様もそのさびしさにおどろいている。陶器市の方向性を考える事が大切“おもてなし”“感謝の心”を忘れず今後も努力して行きたいと存じます。　（佐賀有田町　古田茂）

■いつも楽しく拝見いたしております。本村では日本唯一の「焼畑」が気息えんえんながら今も続けられております。そのうち糸乗農園にもお邪魔したいと思います。そして囲碁を共に楽しめたらさぞかしと思っています。　（宮崎椎葉村　黒木勝実）

■地域に深い愛着を感じつつ、地域や人々のしあわせづくりを研究されている貴研究所の方々の姿がよくわかり、いつも興味深く拝見させていただいております。また、データ分析も新しい視点を提供していただいており、参考にさせてもらっております。　（大阪　山内芳樹）

■糸乗さんが大阪勤務時代に上下町の長期計画策定のご指導をいただいて以来のご縁です。よかネット発刊以来拝読致しております。当時と比べますと質、量とも隔世の感があります。九州での会合へ参加したいと思いながら果たせずに居ます。これからも宜しくご指導の程を。　（広島　松井義武）

■私も常日頃「町おこし」の活動を行っておりますが、この資料が最高の参考になり、討論のなかでも自信を持って発言することが出来ます。21世紀を迎える中で、人の生活にとってなにが重要なのかをさぐってゆきたいと考えています。特に青少年の非行問題の根本はなにか、少しでも減らしてゆく手だてはないのか。田舎の良さをもっと格上げしてゆきたいと考えています。　（大分日田市　石丸邦夫）

上記以外にもたくさんお寄せいただきました。ありがとうございました。

編集後記

■住民を含めたまちづくり会議などで、最近必ず出てくるのがコミュニティの話。過疎の地域でも、ベッドタウンでも、便利な都心でも、「住民同士のコミュニティが云々」「新住民と旧住民の交流がうまく進まない」等とあがるか、さもなくば高齢化社会に対する不安や、子どもの教育など地域問題の解決策として「良好なコミュニティの形成が必要だ」となる。

■近所付き合いの少ないといわれる若い世帯でも、何らかのつき合いは必要だし、欲しているはず。ただ、今は携帯電話やインターネットなど飛び道具が多いので、これからのコミュニティが地域に根差すものなのかどうか。次号で関連記事が出てくる予定です。

■ところでホームページの方には、前号分より本文中の写真をカラーで掲載するようになりました。そちらも是非ご覧下さい。　（伊）

よかネット　NO.47　2000.9

（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671　FAX 092-731-7673
http://www.yokanet.com
Mail:info@yokanet.com

（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
名古屋事務所　TEL 052-265-2401
東京事務所　TEL 03-3226-9130